

---

# 星が見たいね

りふえいる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星が見たいね

### 【Nコード】

N2527V

### 【作者名】

りふえいる

### 【あらすじ】

夏休みも終盤のある日。

高校三年生の新藤利之しんとうりよしは、いとこでマンション管理人でもある時任ときいづ薫かおりの計らいにより、同じ高校の三年生の天崎詩絵あまざきしえと、マンションの一室で共同生活することとなった。

ふたりは交換日記や料理指導などを通じて、徐々に親密になってゆく。

## プロローグ

僕の名前は、新藤利之。

高校三年生で、大学受験を控えています。

夕飯後。いとこの薫ねえさんに電話で呼び出され、僕はマンション一階にあるねえさんの部屋のリビングにいます。

それと、ねえさんでない女の子がひとり。

僕と同じく、座布団の上で正座してます。

「こほんっ」

見知らぬ女の子がひとりいるだけで、緊張しちゃうなあ。

テーブルに置いてある湯飲みに手を伸ばし、お茶をいただこうとしたら。

キッチンから戻ってきたねえさんから、驚くべきことを告げられた。

「これから詩絵ちゃんには、利之のぼっちゃんと一緒に住んでもらうから」

口にトッポを咥えながら、ねえさんが真顔で言った。

「ええっ？ い、一緒に住むの？ どうしてそうなるんだよ」

「な〜によ。嫌なお？」

「え、えつと……他に部屋はないんですか？」

「ないわよ。だから、あなたを利之の部屋に割り当てたの」

薫ねえさんはこのマンションの管理人で、僕はここの真上の一室を借りている。

さつき質問をした女の子は、僕と同じ高校の三年生らしい。

「ルームシェアリングよ。最近、流行ってるじゃない」

「だからって、男女がひとつの部屋に住むのは…え、え〜と、その」  
「間違いが起きるかもって言いたいの？ 利之」

「そ、そっだよっ」

「へえ？ 利之ぼっちゃんに、間違いを起こす勇氣があるうとはねえ」

「だ、誰も、そんなことをするとは言っていないじゃないか」

「ちらりと女の子のほつを見やると、ビクツと反応される。」

「だいじょうぶよ。利之は料理も上手だし、家事もそつなくこなせるし、間違いを起こそうとする度胸もないんだから」

「それは、褒めてるのかい？」

「一部はそう。一部は批判してるの」

真顔で言わないでくれ。

ずずっとお茶をすすり、抗議の意を込めてねえさんをにらむ。

「これは決定事項なの。明日にも業者さんが来て、荷物を運び入れるから。そのつもりでよろしくね」

座布団の上にあぐらをかき、腕を組みながらうなづくねえさん。

新しいトツポを啜えて、僕のほうを見やる。

「ええっ？ どうして前もって言ってくれないんだよ」

「絶対に嫌だつて言うじゃない。今の利之がそうじゃないの」

「事情を説明してくれば、僕が部屋を出て行くとか、何かしらの対策が取れたじゃないか」

「受験勉強がいそがしいからって、ここ数日相手にしなかったのは誰ですかねえ？」

うっ。反論の余地がない。

「わ、私は……いいですよ」

「はい？」

「おっ」

彼女の意外な言葉に、ねえさんはうれしそうな顔をする。

「えっと、新藤君で……いいかな」

「あ、うん」

「新藤君は優しそっだし、管理人さんもいますし。だ、だいじょうぶだと思えますっ」

勇気を出して宣言する彼女は、まっすぐな瞳で僕を見つめていた。

「何かあったらすぐに言つてよ。利之を追い出してあげるからあ」

「え」

「は、はい」

僕を無視して、ふたりの間で協定が結ばれた。

「とりあえず、詩絵ちゃん。自己紹介しましよ」

「あ、えっと。私は、天崎詩絵あまなきしえと申します」

「ぼ、僕は、新藤利之しんどうとしゆきと言います」

たがいにペコリと会釈えしゃくし、あいさつを交わした。

「荷物は明日のお昼前に届くから、出かけたりしちやダメよん。それと、お詫びに明日は回轉寿司へ行きましょ。利之、夕飯の心配はしなくていいからね」

「そ、そっか」

「あ、はい」

かくして、僕と天崎さんの共同生活が始まるうとしていた。

## 第1話

翌日。小鳥のさえずりが聞こえる朝の一時。

ほづきとちりとりを手に、僕はマンシヨンの周りを清掃している。このマンシヨンは八階建てで、河川の近くにあつて景色もよく、それなりに人気のあるところだ。

何部屋あるかは正確には知らないけど、まさか満室状態だったとはね。

それで思い出した。一階にあるポストには、ほとんど名札が張られてたなあ。

「あ、空き缶。誰だよ、まったく」

茂みに落ちていているそれをビニール袋に放り込み、落ち葉や折れた枝をちりとりで掃き入れていく。

「あ」

「ん？」

清掃中。窓とカーテンを開けて、うんと伸びをしている天崎さんを見つけた。

「お、おはよう。天崎さん」

「う、うん。新藤君、おはようございます」

ベランダの手すり越しに、挨拶を交わす僕ら。

天崎さんはパジャマ姿が恥ずかしいのか、カーテンに半身隠れている。

「な、何しているの？」

「清掃だよ。毎朝これやって、ねえさんに家賃を免除してもらっているんだ」

「そ、そうなんだ」

「僕はまだ掃除してるから。天崎さんは早く着替えなよ」

「う、うん」

おや？ 天崎さんのパジャマに描かれた、クマらしきキャラクター

」。

見覚えがあるような…？

「また後でね。新藤君」

「あ、うん」

窓とカーテンを閉める天崎さん。

「さて、と」

僕はゴミ拾いを再開した。

清掃を終わらせて、僕はゴミ出しをしてる。

外で集めたものは、ゴミ捨て場の端のほうにある箱の中に分別して置いている。

それは収集車が来た時に持ってってもらえるよう、薰ねえさんが話を通してあるんだよね。

「あ、えっと。新藤君」

「ん？」

「お、おはよ」

普段着に着替えた天崎さんが、燃えるゴミの袋を運んできた。

「ねえさんに？」

「うん。住まわせてもらうんだから、これぐらいしなさいってそれを受け取り、僕は適当な場所に置いておく。」

「あの人。天崎さんにゴミ出しさせて、何やってんだ」

「新藤君の分も朝ご飯作るって、張りきってたけど？」

「そっか。昨日下ごしらえしたのは、お昼に食べるでしょう」

「あれ、準備してたんだ」

「いつもは学校のお昼にお弁当を持ってってるんだよ。そのあまりを朝食にしている。習慣になってるから、ついね」

「ふうん」

肩まで黒髪が伸びていて、白い無地のシャツにチェックスカートを着こなしている。

僕よりちょっと小柄で、一言で表すなら可愛い。

「さて。僕は部屋に戻って、荷物整理をしないとね」

「もしかして、片付いてないとか？」

「いや、空き部屋はひとつあるから心配しなくていいよ。ていうか、天崎さんが使えそうな部屋はそこしかないし。ほこりが溜まってるだろうから、掃除しとかないと」

「んつと、手伝おうか？」

「いいよ。天崎さんはねえさんのところに戻ってて。僕は片付けを終えたら、すぐに向かうから」

「そつか。じゃあ、またね」

おたがいに手を振って、この場を立ち去った。

自分の部屋の掃除を済ませてから、僕はねえさんの部屋のピンポンを鳴らした。

「はあい」

扉を開けて出迎えてくれたのは、天崎さんだった。

「あれ、ねえさんは？」

「テーブルにいろいろと並べてるよ」

玄関で靴を脱いで、天崎さんの案内でリビングへ足を運ぶ。

「おや、利之。あんたの出番はないわよ」

「別に、手伝いに来たつもりは」

テーブルを見ると、和風定食がずらりと並んでいる。

「ご飯に味噌汁。おかずは、ほうれん草のお浸し、きんぴらごぼう。他にもいろいろあって目移りする。」

「凄いな、これ」

「ふふ〜ん。詩絵ちゃんの引っ越し祝いのついでに、利之の誕生日を祝おうと思ってる〜」

ま、夕方のお寿司の前座みたいなものよ〜ん」

ついでかよ。



「え。新藤君、今日が誕生日だったの？」

「まあ、そうだけど」

それを聞いてびっくりしている天崎さん。

何となく照れ臭くて、頭をかいてしまふ僕。

「ささ。早く席について、いただきますをしましょう」

「その前に僕は、手を洗ってくる」

ふたたりを少し待たせて、僕はキッチンでそれをして、近くにかけているタオルで手を拭いた。

リビングに戻って座布団の上に腰を下ろし、皆と一緒に「いただきます」をする。

「今日、何か買ってくるね」

「明日にすればいいじゃない。夕方にはお寿司食べに行くんだしいねえさんは適当なことを言い、きんぷらごぼろを一口頬張る。

「でも」

「知り合ったばかりなのに、そこまでしなくてもいいよ」

「私がそうしたいのっ」

バンツとテーブルを叩いて、天崎さんはそう主張する。

「そ、それなら……うん。何か、催促したみたいで申しわけないね」

「ううん。これから一緒に住むんだし。大切なイベントなんだから、きちんとお祝いしないと……ね？」

頬を染めて、天崎さんはうつむいてしまふ。

僕も気恥ずかしいよ。

「そっぴや、詩絵ちゃんのお誕生日はつい先月よね？」

「あ、はい。ちょうど一ヶ月前ですね」

「じゃ、夕飯で一気に三つをお祝いしましょうか」

天崎さんはびっくりして、顔を上げて何度もまばたきをしていた。

「え。そんな、私の誕生日なんて」

「じゃあ、僕も何か買わないとね」

「ええ？」

手を振って、いいよと断る天崎さん。

「も、もう過ぎちゃったし。今更、そんな」

「僕がそうしたいんだ」

「う、うう」

天崎さんは小声で「ありがと」と言い、また頬を赤くした。

「プレゼント交換でもしたらあ？」

ニヤニヤ顔で冷やかしてくるねえさん。

「ねえさんは、買うつもりはないんだね」

「あたいはもう用意してるもの」

「は、はやっ」

「とりあえず、交換できるものではないと先に言っておくわ」

「なんだろ？ それ。」

ここからあちこち見渡していたら。

「見つかるような場所に置いとくほど、あたいは甘くないわよ」

ジト目で抗議され、少し気まづくなる。

「そういえば、ここ来る前に何してたのよ？」

「空き部屋の掃除と、いらぬものを捨ててたんだよ」

いきなり話題を変えたねえさんは、不気味な笑みを浮かべている。

「ふっ。どうせ利之のことだから、エッチな本でも処分してたんで

しょ」

「ぶ」

「ご飯を口にする前に、軽く吹き出してしまった。」

「ありゃ？ 凶星かしら」

「な、何を言うんだっ」

「慌てるどころが、ますます怪しい」

助け船を求めようにも、天崎さんのほうを見れない。

「僕はただ、生ゴミと古くなった牛乳パックを捨てただけだよ」

「牛乳パック？」

天崎さんはそこに引っかかったらしく、首を傾げて僕を見つめていた。

「利之の料理道具みたいなものよ」

「え。どうしてそれが？」

「まっ、百聞は一見に如かず。後で見せてもらいなさい」

ねえさんはそこで話を切り上げ、味噌汁をすする。

「新藤君」

「は、はい」

さっきのねえさんのやりとりのせいで、緊張してしまっ。

「できれば、料理を教えてもらえないかな」

「え？」

「できればいいの。私、料理下手なんだよね」

両手を合わせてお願いする天崎さん。

真剣な顔つきを見ると、何だか必死だというのは解る。

「別にいいけど、僕は対してうまいほうじゃないよ」

「謙遜しちゃうって。あたいにこれだけの技術仕込んだの、利之でし

よ」

「ねえさん、僕はダシの取り方とか教えただけで。それ以外は独学じゃないか」

「やくねえ。はいそうですうって言っとけば、モテポイントが一点加算されたのにい」

この人、何考えてんだ。

「ごっつちやま」

ねえさんは先に食べ終えて、いそいそと食器をキッチンへ片付けている。

「ふたりは親睦を深めてなよ。あたいは家賃を集めに回ってくるから」

「あ、その」

「ん？」

天崎さんは不安そうに、ねえさんを見上げる。

ねえさんは軽く洗った手をシャツの裾で拭いて、バニラ味のクレーシユを口に啜えた後で、こちらに視線を向けた。

あ、いいなそれ。飲むアイス、ねえさんだけなんてずるい。

「家賃のほうは、バイトをして払いますので」

「いいわよ。この時期が大事なんだから、ふたりは受験勉強に集中なさい。そういうのは大学に入ってからで結構よ」

「でも、それじゃ」

「ふくむ。気が済まないのなら、利之と毎朝掃除してくれない？遅くても、夕暮れに清掃してくれば構わないから」

「そ、そうですか」

「じゃ。ふたりは朝食を食べたら、二階が上がってなよ」

手を振りながら靴を履き、ねえさんは慌てながら外出した。

ボタン。玄関が閉まる。

しばらく、僕は沈黙していた。

何か話題はないかなあと考えていたら、天崎さんが先に口を開いた。

「そつえば、新藤君はいつからここに？」

「えっと。高校生になってからだよ。両親がアメリカのほうへ転勤しちゃってね。母さんの妹である薫ねえさんが、都心近くの大学を受験するつもりなら僕を預かるよって」

ちなみに僕らの住んでいるところは、埼玉県の北のほうです。

「たまに帰ってくるの？」

「うん。最近会ったのは、去年のクリスマスだねえ」

今年はどうなんだろうね。できうるなら来ないで欲しい。

僕と天崎さんが一緒に部屋に住んでいると知ったら、喜んで冷やかさそうだし。

ねえさん、伝えてないよね？ ちょっと不安です。

「それで思い出した。ねえさんは三姉妹の末っ子で、一番上のお姉さんがこのマンションを所有しているらしいんだ」

「あれ？ 新藤君のお母さんは次女さん？」

「うん。そうだね。所有している人とは一度も会ったことはないけ

ど、凄い人だと母さんから聞いている」

実際どういう人なのか、その人にはぜひ会ってみたい。

「さっきの質問を僕もするけど。天崎さんは、どうしてここに？」

「あ、うん」

聞いた途端に、表情を曇らせる天崎さん。ま、まずかったかな？

「答えたくないなら、別にいいよ」

「そうじゃなくて」

こほんと咳払いをして、天崎さんは口を開いた。

「大学に入ったら、ひとり暮らしをしたくてね。その前の予行といつか、受験勉強に集中したいのもあって、管理人さんの時任ときとうさんに相談したら……」

「僕と同じ部屋に割り当てられた、と？」

「う、うん」

「ねえさんと知り合いだったんだ」

「知り合いつていうか、そうなっちゃったっていうのが正解かなあ」

「んっ？」

「あ、なんでもないよ」

両手を振ってごまかす天崎さん。

何かを隠しているみたいだけど、僕は気にしないことにした。

「ところでさ、新藤君。ひとつ気になったんだけど」

「なに？」

「時任さんって、よく口に何か啜えているよね」

「あゝ。昔、ヘビィスモーカーだったらしくてね。禁煙には成功しているんだけど、口に何かないと落ち着かないんだって。だから癖になってるんだよ。うん」

「そ、そうなんだ」

話題が尽きたところで。

「「ごちそうさま」」

ふたりに手を合わせ、一礼する。

「僕が片付けるから、天崎さんは今ある荷物をまとめといたほうが

「いいよ」

「あ、うん。ありがとね」

食器をもう少しで洗い終える頃に、扉を開閉する音が聞こえた。

「ただいま」

ねえさんが戻ってきた。

すでにクーリッシュは完飲してるようで、それをキッチンにあるゴミ箱に捨ててから、リビングへおもむくねえさん。

「おや、詩絵ちゃん」

大きめのバッグに物を詰め込んでいた天崎さんを見つけ、ねえさんは「あつ」と何かを思い出したよう。

「詩絵ちゃんの洗濯物は、あたいのとこに持ってきてね」

「え？ あ、はあ」

「利之んとこで洗うと問題もあるだろうし。それでいい？」  
最後の問いかけの時、ねえさんはなぜかこちらを向いた。

「僕は意見する立場にないよ」

「ふつ。そんなこと言って、本当は詩絵ちゃんの下着を見たいとか思ってたんじゃないの？」

「ねえさん。僕を何だと思っているんだ！」

「ご、ごめんごめん」

本気で怒ったら、ねえさんは平謝りだ。

「洗濯以外にも問題があつたら、逐一あたいに相談なさい。その度にいろいろと手を尽くしてあげるわ」

「は、はい」

天崎さんは複雑そうに僕を見た。

「ぼ、僕はそういうやましい気持ちはないからねっ」

「う、うん」

微妙な返事。

ねえさんのせいで、信頼が損なわれてしまったじゃないかっ。

「利之。まだ怒ってるの？」

「ねえさんは、僕を追い出したいのかい」

「そ、そういう意図はないわよ。ただ、本当に間違いを起こさないかどうか心配でね」

信じてくれよ、と心の中で意見する。

「でもまあ、利之は真面目だから信用してるわよ」

「だったら、事あるごとに僕をからかわないでくれ」

手の泡を洗い流して、近くにかけてあるタオルで水気を拭った。

「シュレッダーバサミ？」

「ぶっ」

この人、本当はそっち目的で外に出たなっ。

「え？ それが、どうかしたんですか？」

「なんでもないわ」

ねえさんはちらつと僕を見やり、それから天崎さんに視線を戻して、腕組みをした。

「じゃ、じゃあ僕は、一足先に部屋に戻ってるよ」

「あ、私も。もう支度できたから」

僕が玄関に向かおうとすると、天崎さんが重そうなバッグを両手に追いかけてくる。

「それは僕が持つよ」

「え。あ、じゃあ……お言葉に甘えて」

ズシリ。かなり重たい。

「おっつ。利之、モテポイントがプラス一ね」

「なんだそのポイントはっ」

ツッコミを入れながら、僕はそれを片腕で持ち上げる。

「あ、ありがとね」

目の前でお礼を言われると、何だか照れるなあ。

「ねえさんも、後から来るんでしょ？」

小さなビニール袋を持っていたねえさんは、それを天崎さんに手渡す。

中はアイスクリームの詰め合わせのようだ。

「ん。まあ、それまでにいろいろと案内しときなさい。あたいは業者さんが仕事しやすいように手回ししとくから」

「解った」

微笑むねえさんに見送られ。

僕と天崎さんは、この上にある部屋へと足を運んだ。

溶けないうちにと、アイスを冷凍室にしまった後。

「管理人さんのと、同じ間取りだね」

「ん。唯一違うのは、ここからの景色ぐらいかな」

玄関から廊下、そこから僕の部屋と天崎さんがこれから使う部屋、キッチンにトイレ、脱衣所と洗面所からの風呂場。最後にリビングに案内して、僕らはベランダにいる。

「うん。ここからの景色つて、河川敷が見えていいね」

「駅もあるし、あの鉄橋は電車が通るんだ。といっても、通ってる高校は反対方向だけだ」

「夏休みが明けたら、私も電車に乗って通学するんだね。楽しみ」

「

「そつえば、定期はあるの？」

「あ、作ってない」

「じゃあ、ねえさんに話しておかないと」

「う、うん」

ふと、ポケットに入れてある携帯が鳴った。

「誰だろ」

気になってそれを手に取り、開いてみると。

「ねえさん？ どうしてメールなんか」

その内容は『業者が来たから準備よろしく』であり、いよいよかと僕らは意気込む。

「じゃあ、玄関を開けっ放しにしとかないと」



「ごめんね。私のせいでいろいろと気を遣わせちゃって」

「なんだかんだで、僕も結構楽しんでるよ」

扉を開けて固定した後、僕らは通路の手すりに身を乗り出して、下で手を振るねえさんを見つけた。

「じゃ、始めるわよ」

ねえさんの張り切り振りに苦笑しながら、僕は荷物を運ぶのを手伝った。

全ての荷物の搬入を終えて、僕らは一息つく。

「ありがとね。新藤君」

「い、いやあ、これぐらい平気さ」

明日に、筋肉痛になりそうだよ。

狭い廊下内で伸び運動をしつつ、深呼吸を繰り返す。

「利之。たかがダンボール八つでへばってるの？ 理想の細マッチョには、ほど遠いわねえ」

荷物の半分は業者の方に手伝ってもらったけど、どれも全部重いつて。

てか、細マッチョは関係ないだろう。

中身が何なのか気になるけど、怒られるから近寄らないでおこう。

「あたいと詩絵ちゃんは部屋内で、これらを開封して整理しとくからさ。利之は昼食をお願いねえ」

「ええ？ 少しは休ませてよ」

「とか言いながら、立ち上がったってるじゃない」

いつまでも廊下に座ってたら、ふたりに迷惑だと思ったんだよ。

「じゃあ、僕は昼ご飯を作っておくよ」

「できたらノックしてちょうだい」

「そっちが終わってなかったらね」

ボタンと扉を閉められ、僕は追いやられた形でキッチンにおもむく。

「ふっ」

昨日のうちにほとんどやっておいたから、調理をするのは楽なんだ。

ちなみにこのマンションはオール電化で、キッチンにはIHなんだよね。

最近ようやっと使いこなせるようになりました。

「米は早炊きでいいかな」

炊飯器と電気ケトルのスイッチを押して、僕は昨日から仕込んだ食材を冷蔵庫から取り出す。

「よし。おかずを作ろう」

ビニール袋で生姜醤油しょうがじょうゆに漬け込んだ鶏肉は、片栗粉をまぶしてからオーブンレンジで焼く。

「お」

魔法瓶にパスタを、ついでにブロッコリーも入れる。

そこにケトルで沸かしたお湯を注ぎ入れ、ふたをした。

もう一品欲しくて、僕は棚からうすしお味のポテトチップスを取り出す。

「よっ」と

それをボウルに入れて、熱湯を少し注いでからラップをする。

「キュウリにタマネギ、ハムを切らないと」

味噌汁を作るべく、僕は手鍋に水を注ぎ、かつお節をどっさりと放り込んで熱していく。

それからキュウリとタマネギとハムを冷蔵庫から出して、まな板の上でトントンと細かく刻んでゆく。

「すっごおい」

「え？」

包丁を握る手を止めて、声のしたほうを見る。

「新藤君って、ほんとに料理上手なんだね」

「そつでもないよ」

荷物整理はほぼ完了したらしく、天崎さんはメモを片手にじいっ

と観察している。

「何で、タマネギを切っても平気なの？」

「軽く凍らせたから、涙が出る成分が飛ばないんだよ」

「へえ」

「それと水に浸け置きするのもいいね。フードプロセッサとか使うのもありだよ」

「ふうん」

天崎さんが見ている中、僕はミスしないように注意しながら調理する。

刻んだ具は、さつき熱湯で蒸しておいたポテチへ放り込む。

それからマヨネーズとコシヨウを足して、スプーンでかき混ぜた。

「えっと、次はパスタか」

水道で手を冷やしてから、魔法瓶に触れる。

少し熱いけど、力を込めてふたを開けた。

「よっと」

ざるにパスタとブロッコリーが転がり落ちた。

そのざるを上下に振って湯切りする。

「おっ」

チーンと音が鳴り、僕は tong を持って、オーブンレンジからできたての鶏とりのから揚げを皿に盛りつける。

指でブロッコリーをつまんで、同じ皿へと並べた。

「お次は」

ポテトサラダの入ったボウルを、さっきのラップで包んでから、レンジで温める。

できあがったのを取り出し、スプーンで一口。

「ちゃんと火が通ってる。ポテトサラダも、ここでいいかな」

から揚げの脇にポテトサラダを盛りつけた。

「おっと、味噌汁が」

軽く沸騰しているので、かつお節をおたまで取り出す。

あまっていたタマネギと、それと豆腐を適当な大きさにちぎって

手鍋に入れる。

「後は」

スプーンですくった味噌をおたまに置き、手鍋の中で、菜箸を用いてゆっくりと溶かしていく。

「ん。ちょうどいいかな」

おたまで少し味見した後、弱火にして具が煮えるのを待つ。

口をつけたおたまは水で軽く洗って、味噌汁をかき混ぜてからは放置。

「どっこいせ」

僕はかつお節を捨てずに、フードプロセッサの中に入れて粉々にした。

パスタをポテトが少し残っているボウルに入れて、そこにそのかつお節を菜箸でかき出して振りかける。

マヨネーズとめんつゆを和えて、フォークで混ぜながら、袋の中にあるポテチの粉も振りかける。

「これで和風パスタもできた」

それを皿に盛りつけて、炊飯器を見る。

「残り八分か」

味噌汁の具合を確かめながら、炊き上がるのを待とう。

「す、すごくて、なんか悔しい」

「え？」

「私も、それぐらいできるようにならないと」

天崎さんは意気込んでガッツポーズしている。

「改めて、これからお世話になります。それと、料理についてご指導よろしく願います」

「あ、うん。僕でよければ、力になるよ」

メモっている天崎さんを横目に。

僕は頬を緩ませながら、全員分のお茶碗を用意した。

「「「いただきます」「」」

と音頭を取り、リビングで昼食をいただく。

献立は、炊き立てご飯に味噌汁、和風パスタとから揚げ、その付け合わせにブロッコリーとポテトサラダだ。

「お、ダシがうまいわねえ」

ねえさんは和風パスタを取り分けて、それをおかずにご飯を食べている。

「から揚げ、おいしい」

「そう。よかった」

濃い味付けをしていたので、それが功を奏して安心する。

「ちよつと味が濃いわね」

「皆、疲れてるだろうからそうしたんだよ」

「なるへそ。参考にするわ」

から揚げは好評で、天崎さんは「作り方を教えてもらえないかな?」とお願いするほどだ。

「あれ、そこは見てなかったんだ」

「う、うん」

「じゃあ、後でレシピが書いてあるノートを見せるね」

「わ。ありがとう。新藤君」

ねえさんが僕と天崎さんを見て、ニヤニヤしている。

それが何だか嫌だったので、僕はあることを話題にした。

「そういえば、ねえさん」

「なあによ」

「天崎さんの定期。まだないんだって」

「それならもうあるわよ」

ジャーンと言いたげに、ねえさんはポケットからそれを提示した。

「はやっ」

「あ、ありがとうございます」

まるで賞状の授与のように、天崎さんはねえさんからそれを受け取った。

「でも、駅までの地理は詳しくないでしょ？　これ食べてから夕飯まで、利之」

「喜んで案内させてもらいます」

僕が言うと、天崎さんはにっこりと微笑む。

「ん〜っと。午後五時までには帰ってきてね。とりあえず、まだならメアドと番号は交換しといたら？　迷子になったら大変だしねえ」

「あ、そうだね」

ねえさんの意見ももったもなので、僕は携帯を取り出す。

「わわ」

天崎さん。手が震えてて、携帯を落としちゃったよ。

「詩絵ちゃん。慌てなくても誰も取ったりしないわよ」

「そ、そういうんじゃないよ」

「ふふ。ま、ゆっくりやんなさい」

僕と天崎さんは赤外線通信で、番号とアドレスを交換する。

「ごちそうさまをしてから、僕と天崎さんは駅へと外出することになった。」

僕と天崎さんは徒歩で駅前にやってきた。

「わ。人が多い」

「そりゃ、駅前だからね」

物珍しげにあちこちを見回る天崎さん。

落ち着きがなく、早く止めないと危なっかしい。

「天崎さ〜ん」

「あ、ごめんね」

僕が呼ぶと、天崎さんは照れながら戻ってきた。

「定期もあることだし、駅の構内を歩こっか」

「う、うん」

上り線と下り線の場所を教えて、買い物ができる場所を一通り案内した後、僕らは駅構内にある喫茶店で休息していた。

「メロンソーダとカフェオレです」

女性の店員さんが飲み物を持ってきた。

「他にご注文がありましたら、この呼び鈴を鳴らしてくださいね」

「あ、はい」

一礼をして去っていく店員さんを見ると、天崎さんが少し複雑そうな顔をする。

「ど、どうしたの？」

「今の、キレイな人だったよね」

「ああ、うん」

「ふうん」

僕はストローを差し、カフェオレで喉を潤す。

天崎さんはスプーンでバニラアイスを一口食べる。

「あ、あのさ。僕、何か怒らせるようなことしたかな」

「ううん」

「そ、それならいいけど」

天崎さんは微妙な表情のまま。

「ところで、今日はどこに泊まるの？」

「え？ あ、うん。荷物整理はまだ終わってないから、それをするために…」

「そ、そっか。なら、明日の朝食は天崎さんの分も作らないと」

「あ、ありがと。新藤君」

店の時計では午後三時。おやつの間だ。

小腹が空く時間だけど、何かを口にするのはもったいない。何せ、夕飯はお寿司だから。

「そういえば、天崎さんは昨日どうやってこっちに来たの？」

「時任さんが、電動バイクに乗せてくれたの」

「そ、そうなんだ」

ねえさんはバイク乗りで、最近エコを気にして、高性能な電動バイクを購入したらしい。

自動車一台を所有してはいるんだけど、最近はそれに夢中だ。

管理してるマンションが満室だし、家賃収入でウハウハなんだろ  
うね。きつと。

「あ、そうだ」

両手をポンッと合わせて、天崎さんは。

「プレゼント、買わなくちゃ」

それを思い出して、慌ててアイスを頬張る。

「あうっ」

「冷たいものを一気にかき込むからだよ」

頭を抱えて、きんとする痛みに震える天崎さん。

メロンソーダのバナライスは、夏限定で増量中だ。

「急がなくてもだいじょうぶだから」

「うう〜」

痛みは引いたらしく、落ち着いた様子でストローでソーダを飲んでいる。

「ここを待ち合わせ場所にして、午後四時半まで買い物する？」

「新藤君は土地勘があるけど、私は迷子になっちゃうよ〜」

「あ、そっか。じゃあ、プレゼントが何なのかバレバレだけでも。」

一緒に探そうか」

「うん。そうしてくれると助かります」

まだ頭が痛むのか、天崎さんは額に手を当てている。

「温かいものでも飲む？」

「ううん。心配してくれてありがとね」

持ち直した天崎さんは、僕と同じタイミングでソーダを飲み終えた。

「じゃあ、ここは僕が精算しておくよ」

「あ、うん…」

「またのご来店を〜」

女性の店員さんの挨拶。



隣を歩く天崎さんの機嫌が、何だかよろしくないように思えた。

「ど、どうしたの？」

「え。別に、どうもしてないけど」

喫茶店でのやりとりから、様子がおかしい。

「新藤君」

「ん。なんだい」

「買い物だけど、どこでするの？」

機嫌を直したのか、天崎さんが立ち止まって僕に訊ねる。たず

「うん。何を買うのか決めているのかい？」

「小物類かなあ。お金がないから、高いものは無理だよ」

嘆いても、僕らにはどうしようもない問題だ。

高校生だから、それなりのものしか買えないんだよねえ。

「そこのおふたりさん」

「ん」

「え」

「そこ、そう、あなた達ふたりよ。お似合いカップルっ」

駅構内で露店を出している女の人に呼び止められる。

「ぼ、僕らはそういうんじゃない」

「傍からどう見たって、仲の良いイチャイチャカップルじゃないの

！」

否定しようとする、なんだかその女性に怒鳴られてしまう。

「え、えっと。私たちは、ほんとにそういうんじゃない」

「……ああ、そう」

天崎さんが手を振って否定すると、その人はうんうんと納得した。

「そ、それよりも。どうして僕らを引き止めたんですか？」

「ん。何か買ってって」

「単刀直入、それですかい。」

「あ、可愛い」

小物が陳列されていて、知ったキャラクターもちらほらと見かけ  
る。

「おや？ 天崎さんが見てるものって、もしかして…？」

「でも僕ら、そんなに持ち合わせはないんですけど」

「別に、あたしは露店商だもの。少しは値切り交渉に応じるわよ」  
満面の笑顔でそう言われては、こちらもうなづくしかない。

「う、うう」

「ありや？ 何で諦めるんだ？ 天崎さん。買えばいいのに。」

「ん、う。新藤君は何にするの？」

「天崎さんは僕のほうを見ずに聞いてくる。」

「そういえば、天崎さん」

「ん、？」

「天崎さんはたくさんあるキーホルダーに夢中な様子。」

「引越して新生活を始めるんだから、いろいろと足りないんじゃないかな？ 自分専用のお茶碗とか持ってきてる？」

「あ、それはだいじょうぶ」

「そ、そう」

「天崎さんは四つ葉のクローバーのキーホルダーを手を取った。」

「あ、それは二百円ね。色違いでも、ふたつなら三百円にしたげる」  
女の人はここぞとばかりにまくし立てる。

「え、それだと」

「こついうのは、ペアでお揃いにしといたほうがいいわよ？」

「キーホルダーふたつをちらつかせ、女の人は僕らに買わせるつもりだ。」

「あ、ふたりはそういうんじゃないかなかったんだっけ。だったら他のも」

「」

「いえっ。そのふたつをくださいっ」

「天崎さんは財布を取り出してお金を支払い、そのふたつを受け取っていた。」

「はい。新藤君」

「あ、うん」

「そのうちひとつを僕に手渡し、天崎さんにはこりと微笑む。」

「まいどあり〜」

女の人もご機嫌だ。

「あれ、僕は買わなくていいのかい？」

「うん。よくよく考えたら、駅を案内してもらっただけで充分かなあつて」

「そ、それならいいけど」

女の人がニヤニヤと笑っているので、気になってそちらを見る。

「あの、いつもここでお店を出しているんですか？」

「ううん。平日のみで、たまにしかやってないわ」

「そ、そうですね。また機会があったら買い物しようかなあと」

「う〜ん。まあ、気が向いたらやとくわ。おっと、あたしは嶋乃しまの梢すえって言うの。今後ともよろしく〜」

僕と天崎さんは、名刺を受け取った。

す、凄いなこの名刺。鷹たかが墨絵で描かれていて、今にも動き出しそうな迫力がある。

僕らはそれを財布に大事にしまっておく。

「んじゃ、またね〜」

その人は元気に手を振って、駅の外に出る僕らを見送ってくれた。

僕と天崎さんがマンションに帰る頃には、もう日は傾いていた。

「おかえり〜」

ピンポンを鳴らすと、ねえさんが扉を開けて出迎えてくれる。

「ただいま」

「お邪魔します」

僕と天崎さんはキッチンで手洗いをしてから、リビングにある座布団に腰を下ろす。

「おや、なんだか仲良しオーラが出てるわねえ」

鋭いねえさんの指摘に、僕らは同じキーホルダーを見せることで応える。

「あら、四つ葉のクローバー。んじゃ、あたいへのお土産は？」

あ。僕らは同じ反応をした。

「ふうん。ま、いいけど。それ見て思い出したわ。ほいつ　上の

部屋の鍵よ」

ねえさんはポケットから鍵を取り出して、それを天崎さんに手渡す。

「あ、ありがとうございます」

「なくさないように注意してね」

「はいっ」

「さて、さつさと支度しなさい。これから車で、お寿司屋さんに向かうからね」

ねえさんの運転で僕らは、ちょっと遠方のある無添く　寿司にやってきた。

「事前に予約してたんだね」

「そうよ。ささ、席に向かいましょう」

ねえさんの先導で、僕らは席に案内された。

「あたいはこっちで、ふたりはそっちね」

「え？」

戸惑う僕と天崎さん。

「向かい合うよりは、隣同士のほうがいいでしょ？」

「そ、そう」

「あ、じゃあ新藤君がお先に」

僕がベルトコンベアの近くに座り、天崎さんが通路側に座る。

「さて、利之は湯飲みを。詩絵ちゃんは割り箸。あたいはお茶をやるわ」

役割分担して、僕らは食事の準備を済ませた。

「うし。各自、好きなものをじゃんじゃん食べなさい。ただし、皿の合計が五の倍数で止まるように調整してね」

「あ、うん」

「五の倍数？ な、なんでですか？」

天崎さんは、ここに来るの初めてなのか。

「これだよ」

皿を回収口に入れて、その五枚ごとにタッチパネルでミニゲームが始まる。

そのミニゲームで当たれば、カプセルが出てくるというもの。

「へえ〜」

その説明をしたら、天崎さんはうんうんと納得。

「じゃあ、あたいはエンガワとウニを頼もうかしら」

タッチパネルを指で操作し、ねえさんは自分の好きなネタを注文する。

「んで、利之と詩絵ちゃんは？」

「あ、僕はびんとろに甘えびを」

「えっと、焼きハラスにしめ鯖を」

「う〜い」

一皿ずつ注文して、ねえさんは流れてきたマグロを手取る。

「ほら、とりあえず流れてるもので腹の虫を黙らせましょ。利之、

詩絵ちゃんがサーモン見つめてるわ。取ってあげなさい」

「うん」

「あ、ありがとう」

ねえさんはわさびの入った小瓶を手にして、マグロの握りの脇にわさびの塊を置く。

「あれ？ 時任さん、そんなにわさび食べるんですか？」

「違うわよ。ここは、お寿司はさび抜きなの。だからこうして、事前にわさびを盛っておくのよ」

「は、はあ。勉強になります」

マグロを食べ終えたねえさんは、その小皿にガリを乗せて、しよ  
うゆを垂らす。

「お。早速到着ね」

レーンで運ばれてきた寿司を手に取り、ボタンを押して乗り物を返した。

「ささ、じゃんじゃん食べるわよお」

「うん。僕もいただきます」

「あ、はい。私もおいしくいただきます」

夕飯にお寿司を食べた帰り道。信号が赤で、車が止まっている時に。

助手席に座る僕は、ねえさんにこんな質問をした。

「そういえば、ねえさんもプレゼントを用意してたんじゃ」

「あたいのはすでに渡してるわよ」

「は？」

「詩絵ちゃんには利之。利之には詩絵ちゃんという　まあ　素敵なプレゼントがね」

その一言が原因で、車内が静寂に包まれた。

後部座席にいる天崎さんはうつむいてる。

「ふたりして照れちゃってえ　これから同じ部屋に住むんだから、恥ずかしくつてたら将来が心配だわよ」

「ねえさんも早く嫁のもらい手を探さないかね」

「　　なんやて？」

反撃にそう言い返したら、ねえさんから凄まじい殺気が放たれた。お、いいタイミングで信号が青になった。アクセルを踏み込むねえさん。

「こほん。まあ、気にしないでおくわ」

危ない。ねえさんの素が出たから、これ以上は刺激しちゃあいけない。

「ところで、詩絵ちゃん」

「はい？」

「今日はお風呂どっちで入る？」

「時任さんの部屋でいいです」

「そう。それなら出かける前に沸かしといたから、先に入っているわよ」

「でも、一番風呂は」

「昨日はあたいだったけど、今日は詩絵ちゃんがいいよ。上の部屋に行ったら、その順番で揉めないように今決めときなさい」

「天崎さんが一番じゃないとダメだって言いたいんだらう？」

「まっ、そうなんだけど」

天崎さんは手を合わせて「ごめんね」と謝る。

「僕はいいよ。まだ、その、一緒に住むのがどういうのか、想像できてないけど」

「あはは。私もだよ」

おたがい、不安を感じている。

けど、今日にも共同生活が始まるのだ。

それに受験も控えているし、生活環境にまごまごしている暇はない。

「どうにかなるわよ。間違いさえ起こさなければいいんだもの」

「その可能性を高めたのは、どこの誰ですか」

「ん。利之、その発言はもしかしたらそうするかもって、受け取れるんだけどお？」

この人、ほんと苦手だ。

「天崎さん、僕はそんなことしないから信じてくれ」

「え、あ、うん……」

うわっ、微妙な返事。

「ねえさん。始める前から信頼関係を破綻させてどうするんだっ」

「どうするかはふたり次第なもの。本当に信用しているのなら、言葉だけのやりとりに惑わされないはずよ？」

珍しく、まともなこと言うな。

「あたいは利之を信頼して、詩絵ちゃんを同じ部屋に住ませるの。ふたりは受験生だもの。おたがいに得手不得手を補い合えば、受験

勉強も捗るはかどと思ったのよ。けしてふざけてはいないわ。これだけは信じてちょうだい」

真面目に説教されちゃったな。

「とにかく、こんな堅苦しい話は抜きにしましょ」  
「そうだね。」

「新藤君。明日から　じゃなかった。今日から、改めてよろしくね」

「あ、う、うん」

僕と天崎さんは部屋に帰宅した。

といつても天崎さんは自室に着替えを取りに来ただけで、すぐ下に行ってしまった。

「シャワーでも浴びようかな」

いざ共同で生活するとなると、緊張してきたぞっ。

「でも先に、明日の朝食の下ごしらえを　ああっ」  
迷ってたら、どんどん時間が過ぎてしまう。

「よしっ」

とりあえず、下ごしらえをしよう。

それから風呂に入って、さっぱりすればいい。

数十分後。

そうしても、まったく落ち着かないっ。

「はあ」

僕はひとりで、リビングにて勉強をしている。

違う。しようとしている、です。

テレビはつけっぱで、見ている番組も別にどうだっていい。

家族以外の女の子と一緒に暮らす　なんて、憧れではあったけれども。

いざ自分がそうなってみると緊張するし、相手を知らない間に傷つけやしないかという不安があったり、何を考えても冷静になんて



なれやしない。

とにかく深呼吸して、今までと同じようにすればいいんだ。と、自分に言い聞かせる。

「ん？」

ピンポンと、チャイムが鳴った。

「誰だろう？」

天崎さんは合鍵を持っているはずだし、夜も更けてきたし、違う人かなと思ったら。

「た、ただいま」

「あ、うん。おかえり」

扉を開けたら、お風呂上がりの天崎さんがそこにいた。

合鍵忘れちゃったのかな？

「湯冷めしちゃうから、早く入れて」

「ご、ごめん」

僕が後ろに下がると、天崎さんは靴を脱いで、横を通り過ぎて部屋に入った。

それからしばらくして、ドライヤーの音がする。

「ん？」

ほのかに、石鹸の香りがする。

それが天崎さんのだと気づいて、妙にドキドキしてしまう。

「勉強、しないとな」

玄関の鍵を閉めて、僕はリビングに戻る。

ひとりで黙々とシャーペンを動かしていても、自然とドライヤーの音に聞き耳を立ててしまう。

ドライヤーの音が消えて、ほどなく部屋から天崎さんが出てきた。

「新藤君。それ、何の科目？」

「あ、うん。苦手な漢字の書き取りだよ」

「私も、同じのやるね」

トタトタと歩き回る天崎さん。

二冊のノートと筆記用具を持ってきて、「失礼します」と座布団

に腰を下ろした。

「あれ、そのノートに何か書いてあるけど」

「交換日記。時任さんがふたりでやりなさいって、渡してくれたの」

「そ、そっか」

あの人、粋なことするなあ。

下の部屋でほくそ笑んでるよね。きつと。

「私から書くね。そうしたら、明日の朝に交換しよっか」

「う、うん」

それを大事に抱えて、天崎さんにはっこりと微笑んだ。

書き取りを終えて、もうそろそろ就寝してもいい時間。

「天崎さんって、国語が得意なんだね」

「うん。新藤君は、数学でしょ？ 今度教えてね」

「了解。じゃ、もうおやすみしようか」

勉強道具を片付けて起立し、僕は部屋に戻るうとする。

が、目と目が合い、不自然に固まってしまふ。

「あ、その」

「う、うん。天崎さん、お先にどうぞ」

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

廊下はふたりに通るには少し狭い。

天崎さんは手を振って自室に入り、僕はリビングの電気を消して、キッチンへとおもむく。

「明日の朝食は、問題ないかな」

冷蔵庫の中を確かめた後、今後の買い物プランを頭で練りながら部屋に戻る。

「ふう」

初日とはいえ、かなり緊張した。

これから一緒に生活する。

ただそれだけなのに、ここまで神経質になる自分がいて驚く。

「さて、と」

手早く寝る支度をして、ゆっくりと休もう。

「よっと」

押し入れにしまっていた布団を敷いてから、その上に毛布をかける。

僕の部屋は六畳の広さで、座布団と折りたためるテーブル、本棚、押し入れには布団とタンスがしまわれている。

制服などは部屋の隅につっかえ棒をやって、ハンガーで引っかけている。

他にはカレンダーや温度計もあるね。

天崎さんの使っている部屋も同じ広さだけど、中はどういふうふうになっているのやら。

「さて、と」

パチンと電気を消して、僕は布団に入る。

「おやすみなさい」

とつぶやいて、就寝した。

## 第2話

翌日。竹ぼうきを持ち、ふたりに朝の清掃。

「新藤君」

「ん？ なんだい、天崎さん」

「新藤君は、どの部活に入ってたの？」

「料理部だよ」

「あ、だから料理上手なんだ」

「小学生の頃から、僕はずっとそればかりだったよ。クラスメイトからは変わってるねってよく言われた」

「そ、そうなんだ。へえ」

「天崎さんは何の部活に？」

「私は文芸部。普段は本を読んだり、小説や詩を書いたり、歴史ある文学に触れるの」

「あ、だから国語が得意なんだ」

「ん」。昔から読書は好きだったから、それは関係ないかも」

もうゴミは見当たらないし、そろそろ終わりにしようかな。

「ふあああああ」

大きなあくびをする天崎さん。

頬を赤くして、そっぽ向いちゃったよ。

「ごめん。朝早くに、天崎さんに掃除させちゃって」

「え？ い、いいのっ。新藤君が六時前に起きたのには、びっくりしたよ」

「あはは。僕はいつも六時五十五分の電車に乗るからね」

「そっか。じゃあ私は、新藤君に遅れないようにしなくちゃ」

「でも、天崎さんは」

「私はだいじょうぶ。早寝早起きすればいいのっ。徹夜は禁物っ」  
ガッツポーズをする天崎さんだけど、ちよっち心配だ。

僕はいつも午後十一時半には就寝して、午前五時半に起床する。

それから一時間で洗顔、歯磨き、お弁当作り、朝食、軽めの清掃、これらを片付ける。

僕の生活サイクルを知って、天崎さんは愕然がくぜんとしていた。

夏休みが終わる前にそれに順応すると言っていたけど、だいじょうぶかなあ。

「無理はしなくていいよ。僕が天崎さんに合わせる方法もあるんだから」

「それはダメっ」

「そ、そう」

断言されては、僕はもう何も意見できない。

「はわあうっ」

またあくびが出てしまい、天崎さんは明後日のほうを向いた。

「天崎さんは、以前は何時に起きてたの？」

「え、あ。七時です。自転車通学してたの」

目をこすりながら、振り返って答える。

「あ、じゃあ僕のサイクルはきついね」

「だ、だいじょうぶ。すぐに慣れますっ」

こちらを向いて、またガッツポーズで意気込む天崎さん。

ほんのちよっぴり心配です。

朝の清掃を終えて、僕らは部屋に戻って朝食の支度。

天崎さんは僕の隣にいて、メモを片手に調理過程を観察してる。

ただ普通に作るのではなく、お弁当で使うテクニクを僕は披露する。

「あれ、なんで牛乳パック？」

「牛乳パックで、タマゴ焼きを作るんだよ」

「ええ？」

味噌汁を作る際にできた熱いダシ汁を、横に半分に分けた牛乳パックに適量注ぐ。

その中には溶きタマゴ二つが入ってます。

砂糖を小さじ一杯加えて、軽くかき混ぜてからレンジでチンすれば完成だ。

けど、レンジの性能によっては温める時間が変わるので、そこに注意。やりすぎると焦げちゃいます。

熱が伝わりにくくて半熟になっていたら、フライパンで熱すればスクランブルエッグができるので、そちらもおすすめだよ。

ちなみにマグカップなどのほうが熱がよく伝わり、短時間で上手にできあがります。

「新藤君って、そういうふうにはタマゴ焼き作るんだ」

「僕は形の整ったタマゴ焼きは作れないんだよ」

牛乳パックの底を叩き、四角形のタマゴをまな板の上に出す。

それを包丁でサイコロ状に切り分けて、完成だ。

「え。ほ、ほんと?」

「うん。だからこうして、手抜き料理をしてるんだ。味までは手抜きしないけど」

「へえ」

感心してる天崎さん。

「おにぎりも、ほら」

「あ、四角い。間にツナがあるね」

「これも牛乳パックでやったんだ」

まず紙パックを横半分に切って、そこからさらに縦半分を切る。

そうしてできた器にご飯を敷き詰めて、それからおにぎりの具として大人気のツナマヨを挟んで、またその上にご飯を盛る。

それを指やしやもじなどで押ししたりして、正方形か長方形に整える。

もうひとつ手間加えたいなら、そのご飯部分に味噌や醤油をはけで塗って網に乗せ、オーブンで熱すると、焼きおにぎり風のライスサンドを作れるんだよね。

おこげが香ばしくて、とってもおいしいよ。

これもオーブンの性能によって熱する時間が変わるので、焦がさないように注意してね。

「へえ。じゃあ、おかかとか鮭フレークとか、そういうのもサンドできるよね」

「うん。僕としてはツナマヨがおすすめ」

「牛乳パックにも、そういう使い方があるんだ」

「うんうんと天崎さんはうなづいて、メモ帳に書き記している。

「次は、お待ちかねのから揚げだよ」

「あ、うん。メモメモ」

ビニール袋に鶏肉を入れて、そこに七味唐辛子と生姜醤油を適量注ぐ。

それをよく揉んで、調味料が染み込んだら袋から出して、片栗粉もしくはから揚げ粉をまぶして、オーブンで熱する。

これも性能によつては熱する時間が変わるので、注意しましょう。

「オーブンレンジはいろいろとできるから助かるんだよね」

「なるへそ」

天崎さんは舌を巻いていた。

「あ、まだ何か作るの？」

「マカロニサラダだよ。魔法瓶にマカロニを入れて、熱湯を注いだだけでできる」

「へえ」

「パスタとかでも魔法瓶に熱湯を注いで、他にも温野菜を作る為にニンジンやブロッコリーとかも一緒に入れたりするよ」

「は、はあ」

目を見開いて、天崎さんは徐々になだれる。

「ど、どうしたの？」

「あまりに差がありすぎて、追いつける気がしないよ」

「そ、そう？ 僕は、本格的に料理ができるねえさんに追いつこうと、努力してるんだけどねえ」

落ち込んでいる間も、天崎さんはメモ書きしてた。

「さて、もう少しでできあがるから準備しよっか。ねえさんはひとりさみしく食べるみたいだし」

「そ、それはちょっと言い過ぎなんじゃ」

「おっと。あの人、地獄耳だからなあ。気をつけないと」

ふたりで朝食を済ませて、自由時間。

「勉強は九時から？」

「うん。それまで僕は、ここでテレビを見てるよ」

「そ、そう」

妙に落ち着きがない天崎さん。

「じゃあ、私は部屋で準備してるね」

「あ、うん」

天崎さんは自分の部屋に戻った。

僕も自室から、勉強道具を持ち出す。

うーん。まだ八時半かあ。

ニュース番組を見てるだけ。というのもなんなので、お昼の下「しらえをしておこうかな。」

「おや」

と思つたら、携帯にメールが届いた。

「どれどれ」

ねえさんからだ。

『昼と晩はこっちで食べましよう。ごちそうを作りまっせ』

そっか。なら、やんなくていいね。

「あー！」

「ん？」

突然、天崎さんの声でした。

「どうかしたの？ 天崎さん」

気になって、僕はその扉をノックする。

「え？ あ、なんでもないよっ」



「そ、そう。あ、昼と晩はねえさんがご飯作るみたいだから」

「あ、そのメールは私にも来たよ」

「そうなんだ。じゃあ、僕はリビングにいるから」

「う、うん」

何もなさそうではなかった。

ふと、耳を澄ましていると。

「ありや？ 溜め短縮が4でスロット3？ きゃは」

という声が聞こえた。

「なんだろう？」

と思い、天崎さんの部屋のほうを振り向いた。

「あ、新藤君」

ら、本人が勉強道具を持って出てきたよ。

「天崎さん？ 何か、声がしたんだけど…」

「え？ あ、ごめん。なんでもないから、気にしないで」

「そ、そう。もう勉強始める？」

「うん。今日は数学だった？」

「そうだね。昨日言ってたし」

「ありがと」

天崎さんは僕の向かい側に座り、うつむきながらあるノートを差し出す。

「ん？ これって」

「こ、交換日記。とりあえず、書いたから」

「そ、そう。じゃ、次は僕の番です」

照れ臭くて、おたがいに顔を見合わせられない。

「あ、お茶いれようか？」

「え？ あ、うん」

「緑茶、コーヒー。なんでもあるけど、どれがいい？」

「あ、コーヒーで。砂糖入れずに、少しミルクを足して欲しいな」

「そっか。じゃあ、ちょっと待ってて」

「うん」

電気ケトルでお湯を沸かして、インスタントコーヒーを棚から取り出す。

「あ」

「え？」

「な、なんでもない」

一瞬、天崎さんの顔が引きつったような。気のせい、だよな？

「新藤君は、モ カフェ好きなんだ…」

「え？ 何か言った？」

「うっん」

首を横に振って、天崎さんはテレビを見てる。

数分後。注文通り、コーヒーをいれたカップを天崎さんの下へ届けた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

それから僕は、お昼まで数学の勉強をした。

「……いただきます」「」

の音頭を取り、僕と天崎さんはねえさんの部屋で昼食をいただく。

「今日はお肉づくしだね」

「ええ。昨日はお魚だったからね。気分を変えようと思って」

ねえさんは、ご飯、味噌汁、とろけるチーズを乗せたハンバーグ、ポテトサラダの洋風定食を作ってくれた。

「夕飯も作るんでしょ？ ねえさん、献立は何にするんだい」

「そうねえ。ふたりにも手伝ってもらいたいだよ。特に、詩絵ちゃんか料理をどこまでできるのかさ。利之も把握しておいたほうがいいでしょ？」

「え、え？ わ、私もですかあ？ 失敗しちゃいますよお」

「実践も大事よ。頭で学ぶのもいいけど、身体で覚えないと。まあ、何も教えずにやらせはしないから安心して」

「は、はいっ」

試験が目の前にやってきて、緊張気味の天崎さん。

「最初は誰もが初心者だからね。下手なうちに多くを学べるのは幸せなことよね。何せ利之とあたいという師匠がついてるんだから」

「あ、あははは」

苦笑いする天崎さん。

「んで、今日はふたりに買い物に行つて来て欲しいのよ。何か他に予定ある？」

「買い物？ 僕は別にいいけど」

「あ、私も構いませんよ」

「そう。夕飯の食材のメモ、ここに置いておくから。諭吉さんもね」

昼に必要なの使いきつたな、この人。

「どれどれ。お、意外に少ないね」

「あんまり重たいのは持たせないわよ。これ食べたら行つて来てちようだい」

「解つたよ」

「あ、は〜い」

薫ねえさんのお使いで、僕と天崎さんは駅前にやってきた。

「このへんつて、量販店も多いんだね」

「うん。下校途中で買い物もできるし、重宝してるよ」

ふと、天崎さんが足を止めた。

「ん。どうしたの？」

「あ、うん。ちょっと駅中に行つてみたいなあって思ったの」

「別にいいけど。何か、探し物？」

「と、とにかくっ。行つてみようよ」

天崎さんが先に駅の構内に向かってしまったので、僕は慌てて追いかける。

「ぶっ」

やっと追いついた。

「あ、新藤君。ごめんね」

「いいよ。どうしたんだい？」

「ちよつと、と、時任さんに頼まれたの」

「おや、目の前にあるのは露店だ。」

「確か、嶋乃梢さん」

「うん。そこに用事があるの」

「そっか。それならそうと言ってくれればいいのに」

「うう…」

「？」

天崎さんの様子がちよつとおかしい気がした。

「ねえさんの用事なら、早く済まそうよ」

「あ、うん。そだね」

天崎さんと僕はゆっくりとそこに近づいて、やっぱりと顔を見合  
わせる。

「いらっしや お」

案の定、そちらも気づいたようだ。

「また会ったね」

素敵な笑顔をくれる嶋乃さん。手揉みして、くししと白い歯を見  
せている。

「あ、いろいろ増えてる」

「ん？ おや、あの後で欲しくなったのねえ。じゃんじゃん買っ  
てっつね」

「あ、はい。今度ここを見つけたら、買って欲しいと頼まれたので」

「あ、そうなの。ありがたい話だね」

天崎さんが手に取ったのは、確かねえさんが好きだったやつ。え  
くつと、なんだっけ？

「おろ、リラックマのキーホルダーね」

ああ、それだ。リラックマだよ。

ねえさんの部屋で見かけなかったら、名前が出てこなかった。そういえば、天崎さん。この間もそればっか見てたような。

「ん〜っと。とりあえずこれ全部ください」

「わお　そんだけ買ってくれるなら、特別に千円にしたげるわ。そつちの旦那は何にしやすんで？」

嶋乃さんにそう呼ばれて、僕はきよとんとなる。

「ごめんごめん。つい商人あきんど口調が出ちゃったわ」

「は、はあ」

「それで　　っと。あたしはふたりの名前知らないのよね。今更だけど、教えてくれない？」

常連になりそうなので、僕らはそれぞれで名を名乗った。

「利之君に、詩絵ちゃんね」

「はい」

「えっと」

僕はどうしたものかと、ふと目についたヒヨコのキーホルダーを手に取る。

「あら、それはキイロイトリよ。リラックマの世話係ね」

「あ、そんなところにもあつたんだ」

天崎さんは僕の目の前にある小物を物色し、あれこれと手にした。

「ありゃ？　まだ買う気なのね。そんなに買うのなら、通常は三千のところを二千五百円にしとくけど」

「え？　いいんですか？　ひとつ、二百円とか書いてありますけど」

「いいのよ。若いおふたりにサービスしとくわ」

僕は財布を取り出し、嶋乃さんに千円札二枚と五百円玉一枚を手渡した。

「え？　し、新藤君が払わなくても」

「いいんだよ。この間は天崎さんがお金出してたんだから、今度は僕の番」

「あ、ありがとう」

小物が詰め込まれた紙袋を両手で受け取って、天崎さんはいっこ

りと微笑んだ。

「お〜おっ。見せつけちゃって。あたしは所詮、独身貴族よ〜ん」

「だ、誰もそんなこと言ってますんよお」

「冗談よ。軽いジョークっ」

嶋乃さんの表情を見る限り、本気としか思えなかったよ。

「今度来る時は、新しいのを仕入れとくわ」

「え〜っと。いつになります?」

気になるのか、天崎さんが予定を訊ねていた。

「ん〜。あたしは週一か二回、ここで店を出してるけど。次がいつになるかは不明ね」

「そ、そうですね」

「基本は平日だけよ。そのほうが場ばせ銭が安いよね」

「はあ」

ニヤニヤとほくそ笑む嶋乃さん。

「んっと。他に買うものあるの?」

「いえ、僕はこれから食材を買わないといけないんで」

「あらま。主夫しゆふしてるのねえ」

「ま、そんなところです」

「じゃ、またよろしくね〜」

僕と天崎さんは頭を下げて、この場を後にした。

駅近くにある量販店に立ち寄って、買い物を済ませた。

たっぷりと詰め込まれたエコバッグを肩から提げて、僕らは家路につく。

「重そうだね」

「平気だよ。これぐらい」

「そう」

天崎さんの口数が少ないような。

まだ知り合って間もないから、話題がない。

天崎さんが抱えてる紙袋の中身は、ねえさんのものだしなあ。どうしたものか？と考えていたら、もうマンションに着いてしまった。

「じゃあ、それはねえさんのところに届けないかね」

「あ、うん」

ねえさんの部屋のピンポンを指で押す　直前に。

「やっほ〜」

玄関が開かれた。ねえさんだ。

その口にはわさびが啜えられている。

よく生で食べられるね。それ。

「窓からふたりが歩いているの見たからね。ささ、ど〜ぞど〜ぞ見張ってたな、この人。」

何はともあれ、僕らはねえさんの部屋にお邪魔する。

「さて、今日使わないものは冷蔵庫に保存よ」

ねえさんはキッチンに立ち、僕らが買ったものをあれこれと仕分けける。

口にあつたわさびは、すでにポッキーに変わった。

「はい。リストにあつたおやつのは半分は、ふたりの分だから」

それらをビニール袋に詰め込み、笑顔で渡すねえさん。

僕は遠慮せず、それを受け取る。

「さて、詩絵ちゃん。何を作るか、大方予想はついたでしょ？」

キッチンに置いてある食材を見て、天崎さんはピンと来たようだ。

「あの。またハンバーグですか？　お昼もそれ食べたのに…」

「そうね。嫌なの？」

「そ、そういうわけじゃなくて。どうして連続でハンバーグなのかな、と」

「ああ、うん。詩絵ちゃんがどういうハンバーグが好きなのかなって。今更だけど、お昼の焼きハンバーグに、チーズ乗せたのはどうだったの？」

「あ、はい。とっってもおいしかったですよ〜」

「そう。今度は牛と豚の合いびき肉で、煮込みハンバーグを作ろうと思うの。煮込みのほうはソースが肝心だから。こうして見本を見せようってわけよ」

「そ、そうだったんですか。はい。ハンバーグはお弁当の定番ですからねえ。私も作れるようになりたいです」

うんうんとうなづき、決意を新たにする天崎さん。

「お、丸ごとバナナにLG21ねえ　こんなにたくさあん」

「ねえさん、ヨーグルト好きだったの？　初めて知ったんだけど」

「利之。この間、あたいが健康診断受けたの知ってるでしょ。胃の中にピロリ菌がいやがったからさ。この飲むヨーグルト、LG21で<sup>せんめつ</sup>殲滅作戦を実行に移すのよ」

物騒なこと言ってるけど、要は健康のために飲みたかったんだね。

「大変ですね。時任さん」

「詩絵ちゃん。利之。もしかしたら、あなた達の胃の中にも…」

「僕は検査してないし」

「私も調べてませんよ」

「ふ〜ん。ま、それはいいわ。とりあえず、ハンバーグを皆で作るわよ」

「いよいよ、か。」

そう思ったのが、天崎さんがちょっと緊張してる。

「うう」

「だいじょうぶよ。あたいと利之がいるんだから、教わった通りにやれば失敗しないわよ」

「は、はい」

ねえさんの励ましで、やる気になった天崎さん。

これから、夕飯の支度だ。

エプロンをした僕らは、これから煮込みハンバーグを作る。

ソースはねえさんが、ハンバーグのタネは僕と天崎さんが担当す



ることになった。

「あの。デミグラスソースとかのレシピって…?」

「ん〜? ノートに書いてあるから、後で見せてあげるわ」

「あ、そうですか。ありがとうございます」

「いえいえ〜い」

「ご機嫌なねえさんはフライパンに、水とコンソメ、ケチャップと細かく砕いたカレー粉を投入して温めている。

「あ、カレー粉を使うんですね」

「シンプルで、時間がかからないので充分よ」

「僕は合いびき肉をビニール袋の中に入れて、刻んだタマネギとシイタケを入れる。」

それから、タマゴの黄身に水を少々、粉々に削った麩ふも入れる。

「あれ? 新藤君、なんでビニール袋を? しかも、お麩まで」

「手が汚れるからね。僕はいつもこれでやってる。はい、これは天崎さんの分ね」

「あ、ありがとう」

天崎さんはビニール袋を持ち、肉と具材を手でこねこねしてる。

僕も同じ作業をする。

「麩を入れるとね、肉汁が逃げなくなるのよ」

「へえ〜。そうなんですか〜」

「煮込みだから焦げる心配はないわね。焼きのほうは、利之が後で教えてやんなさい」

「うん」

「じゃ、さつさと煮込んじゃいましょ」

ねえさんはソースを煮詰めながら、ちらりと僕らを見やる。

「ひとつはあたいの分で冷凍しとくから。そのタネから三つ取って、一気に煮込むわよ。詩絵ちゃん。やってちょうだい」

「あ、はい」

僕はちよつと離れて見物。

「ゆっくり置けばいいんですか?」

「うん。弱火にしといたから、早く並べてね」

「は、はいっ」

ハンバーグのタネをフライパンに並べる天崎さん。

「ほいっ」と

ねえさんは天崎さんが手を放してすぐ、それにふたをする。

「じっくり煮込めば完成よ。十分ぐらいかかるわ」

「私、ただ並べただけですよね」

「あはは。ソースと具はあたいと利之がやったけど。見よう見まね  
でできるでしょう？ 何事も挑戦が大事だけでも。まずは学んで、

それから実践するほうがいいわ。無知で失敗するよりは断然いいっ」

「そ、そうですね。ご教授ありがとうございます」

「いえいえ。さて、サラダも作るわよ。利之と詩絵ちゃん、手伝っ  
てね」

「うん」

「はあい」

夕飯の献立。

ご飯に野菜サラダ、メインとなる煮込みハンバーグだ。

「……いただきます」

の音頭を取り、早速いただく。

「わ、凄い肉汁」

天崎さんはハンバーグを箸でほぐし、目を見開いている。

「お麩は重要だね。焼く場合も、旨みを閉じ込めてくれるから」

「はあ。おふたりは、ほんとに料理が上手だよね」

「そうでもないよ。僕は手抜き料理ばかりだし」

「それ言ったら、あたかも手間かける料理なんてしないわ。下ごしらえも含めて、一時間で終わるものでないとやってられないしい」

食事しながら、他愛ない話をする僕ら。

「あ、時任さん。後でお土産渡しますね」

「お。楽しみにしておくわ」  
ふと、ねえさんが僕を見てニヤッてしたような。気のせいかな？  
ちよつとした疑心を抱きながら、僕は夕飯を済ませた。

「ただいま」

「おかえり」

「天崎さんもでしょ」

「ふふつ。新藤君がただいまって言うから」

今まで、おかえりと言ってくれる人がいなかったから、新鮮味がある。

僕は玄関で靴を脱ぎ、ねえさんからもらった菓子を棚に置いて、冷蔵庫におやつをしまってから、勉強道具を取りに部屋に戻った。

その前にお風呂の用意をして、リビングで天崎さんと一緒に勉強する。

「午前の続きだっけ？」

「うん。今日は数学だし」

「うう。二次関数とか、ほんと苦手だよお」

「そうかな？ 天崎さん、すらすら解いているような感じだったけど」

「頭が痛くなっちゃうよ」

僕は改めて参考書とノートと対峙する。

「あつ」

「だいじょうぶ。解らないところがあったら、僕が教えてあげるから」

「う、うん。ありがとう」

難しい計算式を目の前にして、天崎さんは頭を抱えていた。

でもそれは最初だけ。コツをつかんだのか、すらすらとノートの上をペンが走り、正答が増えていく。

「凄いね。天崎さんって覚えるのが早いよ」

「そ、そんなことないよ。料理とか、全然だし」

唇をとんがらせる天崎さんを見て、僕はつい笑ってしまう。

「あ、ひどい」

「ごめんごめん」

ふと、携帯電話に設定しておいたタイマーが鳴った。

「おっと。もうそろそろお湯を止めないと」

「そんなのいつの間に」

驚く天崎さんを横目に、僕はお風呂のお湯を止めに向かう。  
リビングに戻り、僕は天崎さんに聞いた。

「天崎さんは、ねえさんのところ使うの？」

「あはは。さすがに連日は無理だよ。それが習慣づくのはダメだ  
つて、時任さんに注意されたから」

「そっか。じゃあ、勉強はひとまず置いて、入ってきなよ」

「あ、うん。お先に失礼します」

天崎さんは勉強道具をそのままに、自分の部屋に戻った。

「さて、僕は明日の朝食の下ごしらえでもしようかな」

キッチンであれこれ支度していると、脱衣所のほうでボタンとい  
う音が鳴る。

「うん。いよいよ、本格的に共同生活が始まるのかあ」

下ごしらえを終わらせて、僕は自分の部屋に戻るなり、あること  
に気づいた。

「おっと、交換日記だ。すっかり忘れてたよ」

テーブルの上に置かれていたそれを手に取り、目を通してみる。

月×日 曜日、天崎詩絵。

今日が、新藤君と共同生活する最初の日でした。

緊張してたの、わかっちゃった？

急にそういう話になってしまって、新藤君も困ったでしょ？

何を書けばいいのか解らなくて、迷走してますっ。  
改めて、これからもよろしくお願いします。

「そっか」

パタンと交換日記を閉じ、僕はそれをテーブルの上に置いた。  
風呂の支度をしながら、僕は次に何を書こうか考える。

「入浴しながらでいつかな」

そう結論して、僕はリビングでテレビを見ながら自習する。  
それから、小一時間ほどして。

「新藤く〜ん」

「はい」

天崎さんが脱衣所から、リビングにいる僕を呼んだ。

「お風呂空いたよ〜」

う〜ん、女の子のお風呂は長いんだなあ。

うわっ。

「ん？ どしたの、新藤君」

ドライヤーとタオルを片手にやってきた天崎さんに、びっくりしてしまっただ。

「な、なんでもないよ。次は僕の番だね」

「う、うん。自習して待ってるから。ごゆっくりどうぞ〜」

「じゃあ、失礼します〜す」

もう就寝時間前。

「今日はこれぐらいにしようか」

「うん。そだね。は〜、緊張したあ」

「あはは。僕もだよ。毎日これが続くと思つと、ちょっとね」

「え。あ、私とじゃい、いやっ?」

「そ、そうじゃないって。今までひとりで勉強してたからさ。まだ違和感があるんだよ」

「あ、そだね。私も、いきなりだからまだ……」

おたがいに、顔を合わせて困惑中。

「星でも見ようか？」

「え？」

僕はカーテンを開け放ち、夜空が見えるようにした。

「わあ。きれい」

天崎さんは窓に張りついて、星空を眺めている。

「僕はいつも星を見て、心を落ち着かせてるんだ」

「へえ。新藤君、星が好きなの？」

「まあ、その。季節ごとに星座が変わるし。なんていうか、ロマンがあるよね」

「ふうん」

天崎さんは勉強道具を抱え、僕に会釈した。

「じゃあ、新藤君。おやすみなさい」

「うん。おやすみ。天崎さん」

トタトタと、天崎さんは自分の部屋に戻った。

「さて、と」

僕はカーテンを閉めて、テレビの電源を消す。

電気と戸締まりを確認していたら。

「ん？」

ふと、リビングのテーブルの下に何かがあることに気がつく。

それが気になり、僕はそれを拾い上げた。

「雑誌？ ああ、僕が風呂に入ってる間に、天崎さんが読んでたのか」

よく見ると、それは女の子のファッション誌。

ねえさんも似たようなの持っていた気がする。

「おや？」

何か、挟んである。付箋だ。

気になったので、そのページを開いてみた。

そこには、スタイルのよい女の子の写真がいくつもある。

「ん。天崎、詩乃しよ…？」

天崎さんと同じ名字だ。

ど、どういふことなんだろう？

「ん〜？」

トン。もうひとつ、何かが足に当たった。

「これって、なんだ？」

それは、ゲーム雑誌のようだ。

「あ！」

それを拾おうとした時、天崎さんが部屋から飛び出してきた。

「あ、あ、あああああああ〜」

僕を指差して、天崎さんはお口があんぐり。

ど、ど、どうしたのっ？

「し、新藤君っ。こ、これらは見なかったことにして！」

「え？ あ、そ、そう」

天崎さんは僕の傍に来て、慌ててそれらを回収する。

他にもい로운んなのがテーブルの下にあったことに、今更ながら気がついた。

「ご、ごめん。勉強の邪魔をするつもりはないの」

天崎さんの様子がおかしい。挙動不審、それが適当だ。

目が泳いでて、落ち着きがない。

見られちゃまずいものが親に見つかったような。そんな感じた。

「べ、別に僕は気にしないよ？ 退屈しのぎには必要だろうし。ま

あ、僕の場合は献立考えるとか、買い物どうしようかとか。そういうのが趣味みたいになってるしさ」

「そ、そ〜なんだ。へえ〜」

んん？ 上の空だぞ。どうしちゃったんだ？

気になったので、僕はそれとなく聞いてみた。

「天崎さん。嶋乃さんのお店でさ、」

「な、なんでもないよ！　じゃ、じゃあね。おやすみっ！」

ドタドタと、天崎さんは自分の部屋に逃げ込んだ。

「え？　あ、あのお…？」

僕は首を傾げながら、自分の部屋に戻ることもなかった。

「なんだっただらう」

もう就寝時間なので、天崎さんの部屋をノックできない。と思っっていたら、何か声が聞こえる。

「え〜？　まだ炭鉱婦やつてるの〜？」

たんこうふ？

ああ、僕の部屋と天崎さんの部屋の壁は、防音がなってないのか。盗み聞きは〜〜と思っただけど、壁に耳を当ててしまう僕。ごめん、

天崎さん。

「まだ護石集めに苦勞してるんだね。私はようやくお母さんに追いつけたよ〜」

ご機嫌な様子（あせこ）の天崎さん。

誰と話しているんだらう？

「まだ炭鉱婦続ける気なんだね。止めはしないけどさ」

たんこうふって、もしかして炭鉱？

んん？　それって、ど〜ゆ〜ことだあ？

「あ、長話はよくないね。もう私は寝るから、じゃ」

あ、電話を切った。

僕は壁から耳を離し、首を傾げる。

「天崎さんの知り合って、どこかの鉱山で働いているのかな？」

ちよっと前に、チリのほうで事故があったのを思い出した。

うわっ、急に不安になってきたぞ。

「あ、明日。天崎さんに聞いてみよう」

という結論に至り、僕はおとなしく眠ることにしました。

と思っただけど、寝れないよっ。



消灯してた電気をつけて、自室の扉の前に突っ立つ。

「うゝん」

気になる。

とはいえ、天崎さんはもう寝てるだろうし。

自分も早く寝ないと。寝坊したら、朝食が作れないっ。

「あ」

何気に見たテーブル。それで、あることを思い出した。

「交換日記、書いてなかった」

今から書こつ。

当たり障りのない文章で締めくくり、僕はもう一度寝ようと布団の中に入る。

「ぶつ」

とりあえず、明日に聞いてみよう。

そう自分に言い聞かせ、おやすみしました。

「ん？」

うう、目覚ましの音がうるさい。

「おいしよ」

上半身を起こしながら、目覚ましを止める。

確認すると、午前六時前。いつも通りの時間だ。

「うう」

寝るのがちよつと遅かったからか、まだ眠気がある。

「ふわわわわわわあああああ」

二度寝したいけど、ダメだぞつ。

パジャマから普段着になり、洗顔後にキッチンに立つ。

昨夜に下ごしらえした食材を の途中で。

「あいた」

包丁で指を切ってしまった。

「あれ？ おはよう。新藤君」

起床した天崎さんが、普段着でキッチンにやってきた。

「わ」

指をなめている僕を見て、びっくりしている。

「あ、ちよつと待っててね」

慌てた天崎さんは自室に戻って、あるバンソウコウを持ってきた。

「わわっ」

ちらつと見えたけど、今のリラックマのだよね。

「あ、し、新藤君？ こ、これどうぞ」

「う、うん」

なんだろう？ 今は考えてる場合じゃないので、水で洗ってから

バンソウコウを貼る。

うん。やっぱりリラックマのバンソウコウだ。

「め、珍しいね。新藤君がそういう失敗するなんて」

「しょつちゆうしてるけどね。バンソウコウありがとう、天崎さん」

「あ、いえいえ」

やっぱり、様子がおかしい。

天崎さんと知り合ってまだ日は浅いけど、明らかに変だ。

とりあえず朝食を作り、その後リビングでご飯をいただく。

「「いただきます」」

献立は、ご飯に味噌汁、焼き鮭にほうれん草のおひたし。

「ん？ どしたの。新藤君」

「あ、いや。なんでもないよ」

「ふん。そっか」

何事もなかったように振る舞う天崎さん。

本人が目の前にいるから、今ここで聞こう。

「天崎さん」

「え？」

意を決した僕は。

「き、昨日のことなんだけどさ」

こう切り出そうとしたけど、結局言えず。

「こ、これを」  
代わりに、交換日記を差し出した。

朝食を済ませた後、僕はねえさんの部屋を訪れていた。

「あら、どうしたの利之？ 詩絵ちゃんほっぽって」

ねえさんは、朝早くから丸ごとバナナを片手に携帯をいじってた。

「ふたりで勉強するのは、九時からだよ。もう掃除は終えたから」

「あ、そうなの。まだ八時半ね。で、改めてどうしたの？」

ねえさんに相談事。

とりあえず、リビングで昨晚のことを話してみた。

「ふ〜ん」

なんでか、睨みを利かされる。

「盗み聞きはよくないわよ？」

「いや、その。話を聞いてた？」

「まあ、大体はつかめたわ」

「は？」

「なんでもナツシング」

だったらなんで、一瞬ニヤけたんだ？

「ねえさん。天崎さんの家族で」

「いないわよ。てか、炭鉱で働いてる人なんて、そもそも日本にいないと思う？」

「そうだよねえ」

「まあ、あたかも気になるっちゃ気になるわね」

「で、でしょう？」

ねえさんも首を傾げてる。

「とりあえず、ここに詩絵ちゃんを呼びましょ。話はそれからだよ」  
丸ごとバナナを完食して、ねえさんは携帯で天崎さん呼び出した。

「お、お邪魔します」

急に呼び出されて、緊張している様子の天崎さん。

差し出された座布団に正座し、僕とねえさんを交互に見る。

「おっほん」

咳払いをしたねえさんが、ちらつと僕を見てから口を開いた。

「詩絵ちゃん」

「はい？　なんでしょうか」

「単刀直入に聞くけど、詩絵ちゃんの家族に鉱山で働いてる人いるの？」

「ふえ？」

天崎さんが固まった。

僕とねえさんは目を合わせるも、何も言えずにいた。

「な、なんですか？　急に」

「ん〜っ。いや、そのね？」

ねえさんが、昨晚のことについて話した。

ちょっと気まずい。盗み聞きしたこと、バレちゃったし。

「は、はあ。私の家族は、時任さんもよく知っているでしょう？」

「あ〜。そうね。よくよく考えたら、そうだわね。けど、まさかっ

てこともあるし。一応聞いておきたかったのよ」

「そ、そうですか」

急に落ち着きがなくなる天崎さん。

僕のほうをちらちらと見て、うつむいてる。

「あ、あのっ！」

「わ」

「び、びっくりした。ど、どうしたのよ詩絵ちゃん」

急に大声を出されたので、僕とねえさんは目を見開いた。

「わ、私っ。新藤君の受験勉強の邪魔したくないから、ヲタクを卒業します！」

くくえっ？

天崎さんがいきなり宣言した。

ど、どうということなのか。僕には、さっぱり。

「ゲームも、リラックマも、受験勉強のためなら捨てられます。うう、新藤君にバレないようにしてたのに…昨日はついつつかり」

僕は状況が飲み込めてないので、天崎さんに何を言えばいいのか解らない。

「あゝ、詩絵ちゃん。とりあえず、落ち着きましょ？」

「で、でも、時任さあ…！」

涙目の天崎さん。

うつむいて、ブルブルと震えている。

な、なんか、僕が天崎さんに悪いことしたみたいで嫌だぞ。

「あ、天崎さん？」

ビクツと反応する天崎さん。

「何か勘違いしてるみたいだね。僕は昨日も言ったけどさ、そういうのは気分転換にはいいと思うよ。勉強ばかりじゃ、さすがに気がめいるしね」

戸惑いながらも、天崎さんに声をかける僕。

「ほ、ほんと？ わ、私…たまにゲームしたり、リラックマグッズ使うけど、いいのっ？」

な、なんだ？

天崎さん、凄い迫力だ。僕のほうが気圧けおされてる。

「い、いいよ。てか、ねえさん？」

ビクツ。今度はねえさんが反応する。

「ねえさんも、リラックマグッズ集めてるよね？ 最近ここに来て思ってたんだけどさ。まったくリラックマを見かけなくなっただよね。どこに隠したの？」

「う、うう」

ありゃ？ 今度はねえさんがうつむいてるよ。

「ご、ごめん！」

バチン。手を合わせて、ねえさんが天崎さんと僕に謝る。

「実はね、詩絵ちゃんがり利之の部屋に住まう前に、いろいろとふざけて注意しちゃったのよ」

「は？」

「え？」

僕と天崎さんは、お口があんぐり。

「いやあ、詩絵ちゃんに利之はゲームとか可愛いものとか、勉強の邪魔になるものはあんまり好きじゃないから……って、ふざけ半分に言っただのを。まさか、詩絵ちゃんが真に受けてるとは思わなくて。にやはは、ごめんごめん」

申しわけなさそうな顔から、いつもの調子に乗ってる顔になるねえさん。

ああ、そう。それ聞いているいと納得したわ。

「……ねえさん？」

「はいっ！」

僕が低い声で呼ぶと、ねえさんはあぐらを止めて、座布団の上に正座する。

「本当に反省してますか？」

「し、しております」

「そう。ならいいけど」

僕が笑うことで、場の空気が和やかになる。

「あ、あれえ？ 利之、今回はそれだけ……？」

まだ何かあると思ったのか、拍子抜けしてるねえさん。

天崎さんは僕が怒っているのを見て、さらにお口があんぐり。

「ねえさんに日頃からお世話になってるのに、そんなに上からは言えないよ。ただ、今回みたいに迷惑をかけるのは止めてね」

「うっ。ほ、ほんとにごめんね。後で、お詫びの品をふたりに贈るわ」

「いや、贈られても……」

ねえさんのプレゼントセンス、微妙だからなあ。ジョークもそうだけど。

「あ、あの。私も、時任さんにお世話になっっているのです。もう、だいたいしょうぶですよ」

「そ、そう？ ふたりが懐深くて助かるわあ」

とりあえず、事は解決したようだ。

と思ったら、ねえさんが急に真顔になる。

「そっいや、詩絵ちゃん。さっきの話に戻るけど、炭鉱ってなに？」

あ、忘れてた。僕も知りたいよ、それ。

「え？ あ、ああ。それですか」

天崎さんは深呼吸して、僕とねえさんを見てから、こう説明した。

「それはゲームの話です。あるものを掘るために、そういうことをする人を炭鉱夫と言います。ちよつと解りにくいですよね」

「ゲームの話か。そっか。それならよかった」

「なあんだ。そうだったの」

安堵する僕とねえさん。

「少し前に、チリの落盤事故があったから…不安に駆られたわ」

「あ、僕も同じことを思ったよ」

「利之も？」

うんうんとうなづき合う、僕とねえさん。

「あ、あははは。ごめんなさい。時任さんに新藤君に、ご心配をおかけて」

「ああ、いいのよ。悪いのはあたいだもん。今日の夕飯、お詫びとしてごちそうを作るわ。何がいい？ リクエストを受けつけるわよ」

「え？ いいのかい？」

僕が言うと、ねえさんはビクリとなる。

いや、その、別に高いものを要求したりはしないよ？

「だったら、徐々にねえさんの作るオムライスが食べたいな。僕、フワフワタマゴを作るの苦手だから。どうしても食べたい」

「へ？ そ、そんなに安いのでいいの？」

「うん。あ、天崎さんは？」

「あ、私も時任さんのオムライスが食べたいです」  
「にこやか笑顔で、僕らはねえさんにオムライスを催促する。」

「そ、そう？ だったら老舗しよせにも劣らない、デミグラスソースでい  
ただく、フワフワオムライスを作ってあげるわあ」

おお、こんだけ気合が入っているねえさんは久しぶりに見たぞ。

僕と天崎さんは、ねえさんのオムライスを楽しみに、夕方まで必  
死に勉強しました。



### 第3話

翌日、早朝。

「ええええええええええええええええつ!？」

天崎さんの声がこだました。

「ど、どうしたの? 天崎さん」

僕は朝食を作っている途中だったので、危うく指を切りそうになった。

「あ、いや、その」

部屋から飛び出してきた天崎さんは、まだパジャマ姿だ。

しかも、リラックマのパジャマ。……可愛い。

「そ、その、新藤君っ」

「な、なに?」

はっ。ぼうつとしてたよ。

「ごめん。急で悪いんだけど。今日さ、焼きハンバーグについて伝授してくれない?」

「……はい?」

朝ご飯を食べて、交換日記を受け取った後。

僕らは勉強 ではなく、買い出しに行きました。

帰ってきて手洗いとうがいをした僕らは、リビングでテレビを見えています。

お揃いのリラックマのコップにカルピスを注ぎ、そのおつまみにごませんべい。

うっん、急にリラックマ色が濃くなったなあ。よく見ると、あちこちにリラックマグッズがある。

リラックマが解禁されて、天崎さんはご機嫌みいだ。

「え? ハンバーグは、夕方に?」

「う、うん」

「どうしたの？ 天崎さん。何か困ったことがあるなら、相談してよ」

今の今まで、天崎さんに何があったのか知らない僕。

詳しく聞こうにも、天崎さんは「あゝ」というだけで、何も言ってくれなかったのだ。

「あゝ。そ、そだね。事情を詳しく話してなかったよね。えゝつと深呼吸して落ち着いた天崎さんは、僕の目を見て話してくれた。

「今日ね、妹が来るの」

「は？」

「あ、あゝ、そのね。昨日メールが来てただけど、見落としてて返信やら拒否があるうとなかるうと、こっちに来るって言うんだよ」

困り顔の天崎さんは、頭を抱えてうなだれる。

「別にいいんじゃない？ 妹さんが来るぐらい」

「いや、その。私、お母さん以外に新藤君と一緒に住んでること伝えてないんだけど」

「えっ？」

あぶなっ。カルピス吹き出しそうになった。

て、てか。そ、それは初耳だよっ。

「た、確かにそれはまずいね。バレちゃったら、大変なことに」

「うう。そっだよお」  
冗談で言っただつもりなんだけど、天崎さんにとっては大事件のようだ。

「ど、どうしたらいい？」

「解んない。でも、詩乃のことだから…」

「しの？」

どっかで見聞きしたような。

「あ、その、ちょっと待ってて」

といって、天崎さんは部屋に戻った。

そうして、ある雑誌を持ってきた。おや？

「ファッション誌？ この間、この下に置いてあった」

「あ、うん。もしかして？」

「ご、ごめん。ちよっとだけ」

手を合わせて謝る僕。

「な、何で新藤君が謝るの？」

と、今度は天崎さんが同じことをする。

「そ、そんなことしてる場合じゃないね。それで、僕はどうすればいいの？」

「あゝ。部屋がここだってバレてるし、新藤君が出てっても、私ひとりじゃ……」

ごまかせない、と。

まあ、確かに僕の生活の痕跡がいたるところにあるしなあ。

「うう。ここに荷物を運ぶ際に、住所とか見られちゃってるしい」

つまりは、諦めると？

「ど、どしたの？ 新藤君。顔がちよっと怖いよ……？」

天崎さんがビクビクしながら、僕の顔を覗き込む。

「いや、その。僕と天崎さんが一緒にいることを」

ピンポーン

「え？」

ふたりして、固まってしまふ。

ピンポーン

「はい？」

ふたりして、玄関のほうを向いて返事をしてしまふ。

「あ、やっぱいる！」

ギクツ。天崎さんが解りやすい反応をした。

「も、もしかして……？」

「あ、あゝ」

天崎さんががっくりとうなだれる。

「え、えっと」

ドンドン。激しく扉を叩いている来訪者。

どうしたものか。考えてもしようがない。

「とりあえず、招き入れよっか」

「……うん」

小さな声で、天崎さんがそう答えた。

「いやあ、ここがお姉ちゃんの住んでるところですかあ」

今リビングにて、リラックマの座布団に腰を下ろしている少女は、明らかに、天崎さんより背が高い。

そして、何というか……天崎さんより派手な印象がある。

いや、その、別に天崎さんが地味ってことじゃないよ？

「詩乃、まずは自己紹介っ」

「あ、すいません。わたしはお姉ちゃんあまなきしの妹で、天崎詩乃と言います。詩乃と呼び捨てにして結構ですよ」

脇にリュックサックを置きながら、会釈して自己紹介する妹さん。

「そ、そう。あ、僕は新藤利之です」

テーブルにカルピスが注がれたコップを置いて、頭を下げて名乗る僕。

「ふ〜ん。この人が　むぐぐ」

「し〜の〜？」

天崎さんが怖い顔で、妹さんの口を手で押さえている。

手でギブアップを知らせると、天崎さんは妹さんを解放した。

「すうううう、はああああ。危なかったあ。お姉ちゃん、窒息したらどうすんのお？」

「何か言ったかなあ？」

「い、いえっ！」

天崎さんの一言で、妹さんはお口にチャック。

う〜ん、上下関係がはっきりしてるなあ。

それにしても、変だ。

「詩乃、何をしに来たの？」

「お邪魔しに来たんだよ」

「本当にお邪魔しに来たんなら、帰ってくれない？」

「え、ええっ？ な、なんかお姉ちゃんが冷たいよお！」

妹さん、表情が豊かだなあ。

笑ったり、泣きそうになったりと、実にいそがしそう。

「あ、あのさ。それぐらいにして、ひとつ聞きたいんだ」

僕は姉妹喧嘩を止めて、妹さんのほうを見る。

「あ、はい。なんででしょうか？」

「うん。どうして妹さんは、僕がいることに驚いてないの？」

僕が感じてる違和感はそれだ。

天崎さんの発言を振り返ると、母親以外のご家族は、僕と天崎さんが同居していることを知らない。

なのに、妹さんは平然としている。どうゆゑのこと？

「ああ、それですか？ ついさつき下で、カッコいいお姉様に捕らえられて、耳打ちされましたけど」

ねえさんの仕業かっ！

「いやあ、まさか。と思っていたら、あ、ほんとだったんだと納得したんです」

「そ、そっか」

ちらつと、僕は天崎さんを見る。

「はあ。それで、詩乃？ 用事がないなら帰って」

「ご、ごめんっ。怒らないですよ。そ、それよりお姉ちゃん。助けて欲しいの」

「話をそらさないで」

「あ、あのね？ 一狩りでいいから、お願い」

「はっ？」

それを聞いた天崎さんは自室に戻り、PSPという携帯ゲーム機を持ってきた。

妹さんと天崎さんは仲良く、リビングでゲームをしています。

「あ、ナルガがピヨった！ やっぱりお姉ちゃんがいると、狩猟が楽だよ」

「ふふん 回避性能6に笛10を持つ私に、隙はなかった」

「笛師には究極の護石だねえ。でもでも、匠4に達人10を持つわたしにも隙はないよん」

「詩乃、背後！」

「え？ あっ！」

何かあったみたいだけど、僕にはさっぱり。

とりあえず、ふたりのためにお茶菓子を用意しないとね。

「このお、どぼりゆめっ！ まだだ、まだ終わらんよ。Gルナー式の、匠つきフレイムテンペストなめんな！」

「ペイントしてこやし投げなよ！ もう、スタンドプレイは止めて。

二頭同時なんだから、不意撃ちもありえるんだよ。各個撃破が基本」

「ご、ごめん」

「とりあえず、ナルガにこやしで追撃するよ。ドボルは後回し」

「ういっ」

何かあったらしいけど、姉妹間で解決したらしい。

てか、ふたりの持つてるPSPが凄いや。

なんていうか、リラックマだらけ。

多分、シールを貼ってあるんだろうね。

「うし！ お姉ちゃん、ナルガの尻尾ぶったぎったよ」

「サンクス さあ、フレイムエリオーネで属強ぞくきょうかけといたから、

一気に仕留めるよ〜ん」

「あいあいさ〜。後ろ足にぶん回ししてま〜す」

「私も、頭にぶん回しだよ」

しばらくして、天崎さんと妹さんは。

「うん」

パチン。と、手を合わせて小気味いい音を鳴らした。

息が合ってるなあ。

「さあ、残るはドボルだね。詩乃、さっさと尻尾割るよ」



「長期戦になるじゃん！ 私はやだよ」

「ええっ！ そ、そんなこと言わないでよう。まだそれだけ未クリアだし、お母さんがああいう状態だから、無理させられないしさあ」

「あ、そっか。解った。笛じゃなくて、ハンマーで行くよ」

「ほ、本気モードのお姉ちゃん！？ ちなみに、何で？」

「匠4のスロ3の護石で成り立つ装備に、剛槌ドボルだね」

「ちょ！ お母さんと同じで、んな神護石かみおまをいつの間にも！」

「あ、つい先日だけど、溜め短縮4でスロ3出たよ」

「じ、自慢きたあああああああああああああああああああ」

「こ、こらっ」

「あ、度々すいません」

「いいんだよ。さて、僕は昼食の下ごしらえしておくから。あ、妹さんも食べるよね？」

「え？ い、いいんですか？ できれば、新藤さんのお手並みを拝見したいです」

「解った。腕によりをかけて作るよ」

「あ、ありがとうございます」

ペコリ。深々と頭を下げる妹さん。

隣にいる天崎さんが不機嫌そうに見えたのは……気のせいかなあ？

ハンバーグの材料は使えないので、お昼はお馴染みのから揚げ定食です。

ご飯に味噌汁、鶏のから揚げに千切りキャベツ、パックのキムチを人数分、小皿に取り分けてます。

「わあ おいしそうだから揚げ〜」

「ちよつと足りないかもって思って、急遽鶏肉を足したよ。あ、食べられそう？」

「だいじょうぶです。こう見えてもわたし、太りにくい体質なんで」

「は、はあ」



「てか、それはお母さんの遺伝っ。私もそうだけどさあ」  
「そうなんだ」

おしゃべりはそこまですて。

「「「いただきます」」」  
をして、各人箸を持つ。

「わお 凄い肉汁。このから揚げ、フワフワで香りがいいですね」

「うん。生姜醤油で漬けて込んで、七味唐辛子も加えてあるよ」

「あ、ほんとだ。ちよつとピリ辛で、食欲が出てきまゝす」

「そ、そか。どんどん食べてね」

ふと、妹さんの隣にいる天崎さんが「むっ」とうなっていた。  
ど、どうしたんだろ？

「キャベツ、よくこんなに細かく切れますね」

「スライサーでやったんだよ」

「すらいさあ？ あ、キュウリとかの？」

「そ。それでキャベツの千切りを作ったんだ」

「へえ。新藤さん、料理お上手ですね」

「そつでもないよ」

妹さんはほんとに表情豊かだ。

幸せそうにから揚げを食べているのを見て、うれしくなる。

「むっ」

「ん？ ど、どうしたの、天崎さん」

「なんでもないっ」

「え。あ、味付けが気に入らなかった？」

「ふえ？ そ、そじゃないよ」

なぜか小声になる天崎さん。

「あ、そ〜ゆ〜ことね」

何か察したらしい妹さんは、ちらつと天崎さんのほつを見て、頭  
を下げる。

「詩乃」

「は、はいっ。なんででしょう、お姉ちゃん…？」

「うっん。後で話があるから、逃げないでね」  
「ぐふっ」

僕には解らないやりとりをする天崎さんと妹さん。  
少し重い空気が流れたまま、僕らは昼食を済ませました。

「はあ。ごちそうさまでしたあ」

「いえいえ。おそまつさまでした」

片付けは僕がして、ふたりはまたゲームをしている。

「お姉ちゃん。アドパかエックスリンク使ってくれないの？」

「え？ どっちも無理だよ。PS3がもうひとつ必要だし。パソコンもないしさあ」

「あ、そっか。しょうがないか。お姉ちゃん、受験勉強でいそがしいしねえ」

洗い物をする途中で、妹さんが僕に聞こえる声量でこう言った。

「これ終わったら、お姉ちゃん。皆でどこかに出かけようよ」

「ええ？ な、何を言い出すの急に」

「だって、ここに来るまで道に迷ったもん。携帯でナビ見てもさ、あれえ？つてさ」

「それは詩乃が方向音痴だからっ」

「み、認めざるをえないわね。あ、お姉ちゃん。金レイアの尻尾切れたよ」

「グツジョブ。速攻で始末するね」

「ヤミノヒツギ、やっぱ強いよ！」

「そうだね。旋律が鬼のようだもん。あ、金レイアやっちゃった」

「あゝ！ 捕獲、捕獲、ほかくううううううううう」

「ごめんごめん。ほら、棘とげが出やすくなったと思えば」

「うう。紅玉が必要だって、言ってたのに。あ、上棘かみとげ出た」

「なぬ？」

「ど、どうしてそこでお姉ちゃんがキレるの？」

「あ、その、そろそろGルナのガンナー欲しくて。武器のほうはもう必要ないんだけど、今まで作らずにいたから。後ひとつだけ必要なんだよね」

「そ、それは……あ、銀レウス来たよ」

「うしっ」

ふたりは仲良くゲームをしている。

んで、僕は何をどうしたらいいのか解らずにキッチンにいる。

「んっつと」

とりあえず、夕飯の下ごしらえ　　といきたいんだけど、できない。

天崎さんが焼きハンバーグの作り方を教えてと言ったので、今こ  
こでやるわけにはいかないのだ。

「やった」　　捕獲したら、どっちの紅玉も出た」

「あ、私は逆鱗も出た」

「なぬ？」

あ、同じ反応するんだ。妹さんも。

「もうこれぐらいでいいでしょ。新藤君が退屈そうだし」

「あ、すいません」

「いいんだよ。久々に姉妹水入らずなんだし」

「そっゆっわけには。さて、お出かけしましょうよ。まだおやつ前  
だし。このままここにいても、新藤さんに迷惑をかけるだけです  
から。このへんに詳しいでしょうしね、新藤さんは」

「は、はあ。僕は女の子が喜びそうなところは、よく知らないし。

あ、ねえさんなら知っているかも」

「ねえさん？　新藤さんにも、お姉さんがいたんですね」

「いやいや。いとこだよ。ついさっき妹さんを捕まえたのがそう」

「え？　あ、あの人が？」

びっくりして、PSPを落とす妹さん。

「はい、キャッチ」

「あ、ありがとうお姉ちゃん」

天崎さんのファインプレイで、床に落ちずに済んだ。

「んじゃ、そのいとこのお姉さんに聞けば、おもしろいところがあるんですね？」

「だろうね。とりあえず、外出するなら支度したいんだ。ちょっと待ってて」

「あ、はい」

「わあ。ゲーセンなんて、久しぶりだよお　ね、お姉ちゃん」  
「う、うん」

ねえさんが教えてくれた場所は、とっても大きなゲームセンター。ボウリング場とか簡単なスポーツ、カラオケのできるところです。ねえさんも行きたいとか言ってたけど、用事があるとかで断念。

「クレールゲームが多いですねえ」

「あ、リラックマあゝ」

声が裏返ったのは、天崎さんです。

「ありやま。お姉ちゃん、ほんとにリラックマ好きだから」

「あはは」

僕らは天崎さんを追いかけて、リラックマの巨大なぬいぐるみが目立つ台の前にいる。

「……………」

天崎さんは腕を組んで、無言でその台を観察していた。

「あれ、何をやってるの？」

「新藤さん。しっ」

「え？」

妹さんに人差し指を立てられたので、僕は黙って天崎さんを見守る。

「うむ」

うなづいて、天崎さんは五百円を投入した。

「え、やるの？ あんなに大きいので、取れないよ」

「新藤君。私の実力、ご覧あれ」

こちらを振り向かず、天崎さんは自信満々に親指を立てた。

その自信も空しく、クレーンはぬいぐるみをつかみあげることすらできず、わずかに動かすだけだった。

「あ、やっぱりダメだったね」

「いえ、まだ二回あります。一回二百円の台ですけど、五百円を入れると三回できるんです」

「えっと、妹さん？もしかして、天崎さんは…？」

「三回で取れると判断したんです。あのでっかいリラックマのプライズを」

ま、マジでっ？

過去にねえさんもここに来て、あくどくと言って、五千円ぐらい損しているの見たけど。

ほ、本当に取れるんだろうか…？

「妹さん。プライズってなに？」

「はい？ ああ、クレーンゲームなどの景品をプライズを呼ぶんですよ。勉強になりましたか？」

「そっか。ありがとう」

「いえいえ」

それよりも、天崎さんの背中から凄い気迫を感じる。

あ、二回目の見逃しちゃったよ。

「ふっ」

不敵な笑みを浮かべる天崎さん。

よく見ると、さっきよりぬいぐるみが動いている。しかも、落下口に近い。

「ラスワン」

「「ごくり」」

僕と妹さんは、息を飲んで見守る。

ふと、周りに人が集まってきた。

天崎さんのクレーンの操作の仕方を見て、何かを感じたようだ。

「よしっ」

わ、取っちゃったよ。天崎さん、あのでっかいリラックマのぬいぐるみを。

「おめでと〜ございま〜す！」

カランカランと全力で鈴を鳴らす女性の店員さんに、僕はびっくりする。

「あ、新藤さん。驚くのも無理ないですよ。いきなり大音量でやってくれますから」

「そ、そうだったんだ。ふうっ」

心臓がバクバク言ってるよ。深呼吸しないと。

「えっと」

おや、それを抱えた天崎さんが僕らのほうでなく、小さな女の子がいるほうに駆け寄った。

「はい。これどうぞ」

「え、ええ？」

「あ、え？ そ、その、ただけじゃないですよ」

そう答えたのは、その女の子の母親らしき女性。

女の子はそのぬいぐるみを受け取って、にっこりと微笑んでる。

「いいんですよ。まだ私はここに来たばかりですし、さつきから」  
「の子がこのリラックマを見つめてたので、欲しいのかなあって。さ  
さ、遠慮せずにどうぞ」

「あ、で、でも。タダというのは嫌なので、これだけは」  
「わ」

その母親らしき人は財布を取り出し、天崎さんに五百円玉を手渡した。

「あ、ありがとうございます。何度やってもダメだったので、本当に感謝してます。ほら、千絵もお礼を言いなさい」

「ありがとう。おねえたん」

「いえいえ そのリラックマ、大事にしてね」

「うんっ」

その母子は何度も天崎さんに頭を下げて、笑顔でこのお店から出て行った。

「す、凄いね。天崎さん」

こちらに戻ってきた天崎さんを迎える僕ら。

天崎さんが激闘を繰り広げた台は今、店員さんが新たにぬいぐるみを配置している。

「時任さんに、あれ取れるなら取ってきてって言われたんで。帰る時にもう一度やるよ」

なぜか、ひそひそ話す天崎さん。

店内の音がうるさくて、聞き取るために耳を寄せちゃったよ。

「おっけ。帰りにもう一度ね？」

「うん。あ、新藤君。ごめんね。私の都合で時間取らせちゃって」

「い、いいんだよ。人助けする天崎さんに、感動した」

素直にそう言つと、天崎さんは「えへへ」と伏し目がちに照れている。

「さあ、今度は小さなリラックマを！」

顔を上げて宣言した天崎さんは、リラックマの小物がたくさんある台へとまっしぐら。

「天崎さんつて、こついうのも得意なんだね」

「お姉ちゃんはお母さんからクレーンゲームについて、あれこれ伝授されていますし。ささ、早く追いかけましょう」

「そ、そだね」

なるほど。師匠がいたのね。

天崎さんのお母さんつて、凄い人なんだなあ。

もちろん。天崎さんも優しくて、凄い特技を持っているんだなあ。

天崎さんはクレーンを見事に操り、景品を獲得している。

よく見ていると、天崎さんのクレーンの使い方は実に巧みだ。

クレーンはつかんで持ち上げるものだと思うんだけど、天崎さん

はそれをせず、クレーンの片端だけを利用して、ぬいぐるみの山を動かしたりしている。

さっきのでっかいリラックマも、少しずつ動かして、ポトンと落とすんだそうなの。

そして、今やっている小さなぬいぐるみの山も、その技で大きく崩されていた。

「奥義、山崩しでゲットお」

「おめでとございま〜す」

鈴が鳴らされたので、天崎さんの声がよく聞き取れなかった。

たった数百円でぬいぐるみの山を崩し、数十個もゲットしてる天崎さんは凄い。

ねえさんにも、見せてあげたいぐらいだ。

「ほれほれしますねえ。さっきから、店員の方々がこちらを警戒してますよ」

「え？ あ、そういうえば……何か、視線を感じる」

実際、店員さんだけじゃない。

周りのお客さんも、天崎さんのクレーンの使い方を観察しに近くに集まっていた。

「あ、こんなに持てないよ〜」

「ういつ。ちよつとビニール袋持ってくるね」

妹さんはそう告げて、この場を離れた。

「わわ。天崎さん、僕も手伝うよ」

「あ、ありがとう」

取り出し口には、大量のリラックマ、コリラックマ、キイロイトリが溢れている。

ダブリもあるけど、見た限り全種類はゲットできたようだ。

「おつとと」

手で持てる分だけ取り出そうとしたけど、ダメだ。数が多すぎる。

「新藤さん。お姉ちゃん。無理しないで、これこれ〜」

「あ、ありがとね。詩乃」



「いえいえ。後で、わたしにもいくつかちょうだいね」

妹さんが持ってきた大きめのビニール袋に、今ゲットしたものを詰め込む。

「うわ。もうパンパンだ。」

「ま、まだ何かやるの？ 天崎さん」

「え？ あ、うん。今度はお菓子類を落とそうかなと」

「お菓子？ じゃあ、もうひとつ必要 おっと」

妹さんが、僕にビニール袋を差し出した。

「まだまだいるだろうなと思ってましたよう これでもいいでしょうぶです」

「そ、そっか。用意周到だね」

「お姉ちゃんのことですから、まだまだ取る気だらうなって解りますもん」

「あはは」

僕はそれを受け取り、天崎さんのほうを見る。

「むっ」

あれ？ 何か、頬をふくらませてる。

「お、お姉ちゃん。っ、次は何を狙ってるの？」

「うまい棒とか、コアラのマーチ」

「コアラのマーチ？ あの小さい箱なら、僕にも取れそう」

「いえいえ。新藤さん、ゲーセンにあるお菓子類はですね。店頭に並んでいる普通のとは、違ってたりまするんですよ？」

「え、そうなの？」

「まあ、百聞は一見になんとやらですね」

ふたりにその台に連れられて、僕は驚く。

「わ。ほんとだ。大きいコアラのマーチだ」

「うまい棒は三十本の袋のまんまですけど。あれはドンキとかでも売ってますし」

ねえさんはぬいぐるみばかりだったから、こういつとこまで見てなかったよ。

「て、てか。これ取れるの？」

恐るおそる指差して、天崎さんに訊ねる。

「え？ 余裕だけど」

ま、マジでっ？ だって、大きな容器のコアラのマーチ、三つが重なって塔みたいになってるよ。

「まあ、初心者には難しいですね。わたしはもっぱら、うまく棒しかできませんよ。この大きめの容器とかは、クレーンでつかむという発想そのものがタブーですから」

「と、ということは、さっきみたいに引っかけて動かすとかするの？」

「うん。とりあえず、二回やれば充分」

「ええ？」

天崎さんはその台を軽く観察して、百円を二枚入れた。

クレーンを操り、その片端を利用して、その塔を見事に崩してみせた。

「うわ。あんなにあっさり」と

今落ちたのは、二つ。土台の一つは天崎さんでもどうしようもないんだね。

まだ塔はもう一組ある。

それもいと簡単に崩してしまう天崎さん。

「おめでとございま〜す」

また鈴が鳴ってる。てか、周りのお客さんが拍手してるよ。

「これなら僕にもできそうだね」

「いえ。止めておいたほうが懸命です。実はこれ、数ミリのズレが失敗に直結します。まず一番上の逆さまになっている容器のふた。

それとバケツ型の本体との間にクレーンの片端を突っ込ませて、クレーンが閉まる動作で塔を揺さぶるんです。で、うまくいけば今みたいに塔一組につき、二つゲットできる。悪くても一つは確定ですね。まあ、お姉ちゃんの実力ならこれぐらいは確定でしょう」

「へ、へえ〜」

さり気に天崎さん、神業を披露してたのか！ そりゃあ、人も集まるわけだよ！

簡単そうにやってたから、自分にもできるんじゃないか？ って勘違いしちゃった。

「詩乃。私の方法は確実じゃないよ。揺さぶるにしても、重ね方次第ではこの方法では無理だもん。ちよつと不安だったけど、四個取れたよお」

天崎さんはでっかいコアラのマーチを抱えて、満面の笑み。

ふと、天崎さんは近くで見っていた小さな姉妹に近づき、コアラのマーチを二つ手渡した。

「え、ええ？」

「わ、く、くれるのお？」

「うん。これなら、ケンカしないでしょ？」

その姉妹の両親らしき人が、天崎さんに頭を下げた。

「あ、そ、その、ありがとうございます」

「いえいえ。さすがに食べ過ぎちゃうので、私たちはこれだけでお腹一杯です」

天崎さんが僕らを見たので、僕と妹さんはお腹を押さえて笑ってしまっ。

「あ、これを」

「え、あ、わわわ。こんなに」

天崎さんは、その両親から五百円玉を受け取った。

「儲けましたね」

「い、妹さんっ」

隣にいる妹さんがニヤニヤしてるので、突っ込まずにはいられない。

「あ、新藤君」

「おっと。ビニール袋ね」

僕は天崎さんに駆け寄り、大きなコアラのマーチをそれに詰め込んだ。

「ご、ごめんね。新藤君」

「いいんだよ。これだけあれば、ねえさんも大喜びだね」

僕はビニール袋を五つ持つてる。ぬいぐるみにお菓子で満パンだ。「もうすぐマンションですね。あ、それと夕飯も」

「し、詩乃。やっぱり食べる気なの？」

「うん。料理下手だったお姉ちゃんが、どれだけ上達したのか。興味あるも〜ん」

ああ、なるほど。

朝に天崎さんが騒いでたメールの内容が想像できた。

「うう。自信ないよお」

「そう？ 天崎さんも少しはできるようになったじゃない」

というのは嘘だ。そもそも、僕は天崎さんがひとりで調理しているのを見ていない。

実際問題、天崎さんはハンバーグをビニール袋でこねる、フライパンに並べる。これぐらいしかやっていない。僕もねえさんも、天崎さんに包丁を握らせてなかったね。

近々教える予定だったけど、まさか今日で、しかもぶつつけ本番だとは。

「し、新藤君つ。余計にプレッシャーかけないでよう」

「ああ、ごめんごめん」

他愛ない会話をしているうちに、マンションに辿り着いた。

「あれえ？ 時任さんがやってきてもいいタイミングなのに」

と天崎さんが言うが、ねえさんの姿も声もない。

そっぴや、用事ってなんだろう？ 詳しくは聞いてないけど。

「とりあえず、部屋に戻って夕飯を作らないと」

「そ、そだね」

「わあ〜い 新藤さんとお姉ちゃんの、共同作業の料理が食べれるっ」

「し、詩乃つ。変なこと言わないで」

「あははは」

妹さんの口撃くちげきに、天崎さんはたじたじた。

エレベーターで二階に上がり、僕は自室の扉を鍵を開ける。

「……ただいま」

と、玄関で声が揃う僕たち三人。

「詩乃は違うでしょ」

「え〜？ 今日だけはいいいじゃあん」

「むっ」

とりあえず僕が先に入り、荷物をリビングの端に置く。

それからキッチンで手を洗い、コップに水を注いでうがいをし、

調理の準備に入る。

「わあ。新藤さんって、手際いいですね。あ、わたしもうがいた  
いんですけど」

「そっち。今天崎さんが入ったところで、手洗いうがいしてね」

「はい」

元気よく返事する妹さんは、ニヤニヤしながら洗面所のほうに向  
かった。

「きゃ！」

直後、天崎さんの悲鳴が聞こえた。

「な、何するの」

ん？ 大声で怒鳴るかと思ったら、小声だぞ。

何か話しているみたいだけど、聞こえない。

「おっと」

よそ見していると危ない。

また指を切ってしまうぞ。気をつけないと、ね。

「うん」

まだ天崎さんが来てないけど、食材は一通り揃っている。  
エプロンを身につけたし、後は調理に取りかかるだけ。

なんだけど、どうしたんだろ？ 遅いなあ。

気になって、廊下のほうへ歩いていったら。

「あ、ごめん。新藤君」

慌てんぼうの天崎さん。危うくぶつかりそうになったよ。

「天崎さん？ もう用意はできてるよ」

「そ、そつか。じゃあ、頑張っつて作る」

「う、うん」

何か様子が変だな。天崎さん。

僕と目を合わせようとしないし。

「じゃあ、わたしはご飯ができるまでお守り掘っつてまゝす」

「まだ炭鉱婦やるの…？」

言いながら、後ろを振り返る天崎さん。

「あはは。別にいゝじゃん」

妹さんは屈託のない笑顔で、リラックマのぬいぐるみとPSPを抱えていた。

「はいはい。ガンキン主任にどつかれないようにね」

「うゝい」

リビングでゴロ寝して、テレビを見ながらゲームしている妹さん。

リラックスしすぎじゃないかあ？

「ん」

「え？ なに、新藤君」

「ああ、いや。なんでもない」

「そ、そう？」

ちよつと自己嫌悪。

「ふう。私に、できるかなあ」

リラックマのエプロンをした天崎さんは、ちよつと自信なさげ。

緊張してるようなので、僕はその肩を揉んでほぐしてあげる。

「わわ。びっくりしたあ」

「そう硬くならなくていいよ。ハンバーグを作るだけじゃないか」

「そ、それでも緊張するよおっ」

天崎さんは流しで念入りに手を洗い、それからタマネギとシイタ

ケをまな板の上に置く。

ひき肉とビニール袋は、まな板の脇にある。刻んだ具をすぐに入られるように。

「フライパンでは、何分ぐらい焼けばいいの？ ちょっと解らなくて」

ひそひそ声で、天崎さんは僕に質問する。

「ちょっとだけ目が合ったけど、すぐに目をそらされた。」

「うん。質問に質問で返して悪いけど、焼くと蒸すのどっちがいい？」

「へ？ これからハンバーグを焼くんじゃないの？」

「蒸すほうが余分な脂が落ちてカロリーも減るし。焼くと焦げる心配もあるしね。どっちがいい？」

「うん。蒸すほうがいいかな。そっこのほうがヘルシーだし」

「なら、付け合わせを用意したほうがいいね」

「え。なんで？」

「ちょっとお待ちを」

僕が見本としてタマネギとシイタケを包丁でみじん切りにした後、天崎さんは危なげな手つきでそれを真似する。

その具材を、塩コショウを振ったひき肉と一緒にビニール袋の中に入れる。

「ニンジンにジャガイモ、ブロッコリー？」

その間に僕は冷蔵庫から、これらの野菜を手にとっていた。

「うん。一緒に調理するんだ」

「え。どうやって」

「天崎さんはそのままハンバーグのタネを作ってて。僕は隣で野菜を切ってるから」

僕はタマゴ割って、その黄身と白身を分ける。黄身に水を少々、それから細かく削った麩を、そのビニール袋に入れてあげた。

「あ、ありがとう」

それを両手で持って、こねこねと混ぜている天崎さん。

「あれ。プロツコリーは、茎のほうを使うの？」

「そうしないと、台ができないよ」

「台？ 何を乗せるの？」

「ハンバーグだよ。そうすることで、落とした脂を再び吸わないようにするんだ」

「へえ〜」

野菜を四角い長方形にしたら、次に僕はフライパンのふたをアルミホイルで覆う。

「ど、どうしてそんなことをするの？」

「簡易グリルだよ。ほら、フライパンを熱しないと」

「あ、うん」

天崎さんはビニール袋を脇に置いて、フライパンを温めている。それからタネを両手で持ち、パンパンと空気抜きをしていた。

「上手だね」

「そうかな。これぐらいは、誰にでもできるんじゃない？」

「あはは。僕はね、空気抜きは苦手なんだよ」

「え。そうなの？」

「うん。たまに力加減を失敗して落としたりするから、やりたくないんだ。だから、手抜き調理することを覚えちゃったんだよ」

「でも、そっちのほうが凄いなと思うけど」

「そうして真心込めて作ったほうが僕は好きだけどね」

「そ、そっか」

目をパチクリとさせて、天崎さんはタネの入ったビニール袋をまな板の上に置く。

「えっと、三つだよね？」

「うん。ちゃんとできるかな？」

「や、やってみます」

緊張している天崎さんは、手洗いた後で深呼吸してる。

「うん」

意を決して、ビニール袋の中のタネをキレイに三等分してまな板



に置いた。

「こ、これでいい?」

「そうだね。大きさも同じくらいだし」

僕は小さじ一杯のサラダ油をフライパンに注ぎ、ハンバーグを強火で焼くように指示する。

「片面一分半ずつね。ほら、キッチンタイマーで三分」

「あれ? その野菜の台は、まだ使わないの?」

「そうだよ。軽く火を通してから使っんだ」

「そ、そっか。うん。じゃあ、ハンバーグを」

天崎さんはていねいにハンバーグを置いて焼き始めた。

不安そうにフライパンとタイマーを交互に見ている。

「じゃあ、それを引っくり返して」

一分半が過ぎ、フライ返しで上手に返す天崎さん。

「手際がいいね。天崎さん」

「そ、そうかな?」

「僕、オムライスとか苦手なんだよね」

「え。あ、だから時任さんにオムライス頼んだんだ。その、新藤君タマゴを引っくり返すのに失敗しちゃうの?」

「うん。フワフワタマゴをフライパンで作ろうとすると、思うようにできないことが多々あってね。日々勉強しております」

「新藤君がそうなら、私はまだまだなんだね。精進するであります」

僕は電気ケトルでお湯を沸かして、タイマーの時間を確かめる。

「あ、もうすぐ鳴るね」

天崎さんはタイマーが鳴る直前に、フライ返しでハンバーグ三つをまな板の上に置く。

「フライパンの焦げカスをキッチンペーパーで取り除いて」

「うん。両面ともしっかり焼けてるね」

「これから仕上げだから、気を抜かないで」

「は、はいっ」

あ、また硬くなっちゃった。

「わわっ」

「だいじょうぶ。もう少しじゃないか」

「う、うん」

肩を揉んで緊張を和らげようとすると、天崎さんは顔を赤くして僕から離れる。

「も、もういいよ。だいじょうぶだから」

「そ、そか」

今更だけど、僕も恥ずかしくなってくる。

「じゃあ、フライパンに野菜を敷いて。お湯を注いでから、その上にハンバーグを置くんだった」

「うん」

台となる野菜がひたひたになるまでお湯を入れ、アルミホイルで包んだふたをして、中火の弱で八分間蒸す。

「えっと、次はソースでしょ？」

タイマーを設定した後、天崎さんが聞いてくる。

「うん。まあ、調味料を混ぜるだけだよ。三人分だから、これぐらいがちょうどいいね」

ケチャップと中濃ソースを大さじ二杯、それにヨーグルトを小さじ二杯混ぜる。

たったそれだけ。

「あ、簡単。時任さんのもそうだったけど、あんまりソースに時間かけないんだね」

「あははは。僕とねえさんは一時間以上の、手間暇かかる料理はしたくない主義なんだよ。時短テクニクを駆使すれば、いろいろなものできるしねえ」

「そうなんだ。また今度教えてね」

「うん」

僕はハンバーグができるまで、残っている味噌汁を温め始めた。

「「いただきます」」

「い、いただきます」

僕らはリビングでその音頭を取った。

ただ、妹さんだけ元気がない。

「詩乃。どうしたの？」

「あゝ、うん。なんでもないよ」

献立は、ご飯、味噌汁、天崎さんの作ったハンバーグに、付け合  
わせにニンジン、ジャガイモ、ブロッコリーだ。

「あ、ちよつと待って」

「ん？」

僕は味噌汁をすすろうとした時、天崎さんに止められた。

「み、味噌汁からなの？」

「うん。そのつもりだったんだけど」

「じゃあ、どうぞ」

「え？」

「な、なんでもないよ」

「ど、どうかしたの？」

「あ、やっぱそうだよねえ。ごめんごめん」

妹さんは察したらしく、ハンバーグを箸で切り分けてる。

「そ、そういうことね」

「う、うん」

ハンバーグの感想が欲しかっただね。ごめんごめん。

「あはは。お姉ちゃん、新藤さんにあゝんでもしてあげたらあ？」

「「ぶっ」」

妹さんの発言に、僕と天崎さんは吹き出してしまふ。

「な、何を言い出すのっ。詩乃！」

「お、落ち着いて。天崎さん」

「うゝん」

怒っている天崎さんを見て、妹さんはちよつと複雑そう。どうし

たんだろ？

僕らを尻目に、妹さんはハンバーグを頬張った。

「あ、おいしい」

一口食べた妹さんは、ハンバーグの感想を述べる。

「ほ、ほんと？」

「うん。キッチンで、新藤さんとイチヤイチャしながら作ってたか  
いがあったねえ」

「う、うう」

実際問題、調理中は忘れてたからね。妹さんの存在を。

僕も気恥ずかしくて、天崎さんと一緒につつむいてしまう。

「新藤さんも、早く食べてみてくださいださあい。ご飯が進みますよお」

「女の子らしからぬ食べっぷりで、妹さんは僕を急かしてくる。

見ている限り、ほんとにおいしそうなのハンバーグだ。

「はむっ」

では、僕も一口。

「ど、どうかな？」

よく噛んで、ハンバーグを味わう。

「うん。よくできてるよ」

「よかつたあ」

ほっと安堵する天崎さん。

「軟らかくて、肉汁がたっぷりだ。天崎さんのタネの作り方が、上  
手だったんだね」

「ええ？ し、新藤君が教えてくれたからだよ。新藤君のおかげ  
です」

そんなやりとりをしていると、妹さんがこんな一言。

「あのお、やっぱりわたしってお邪魔ですかあ？」

深刻そうな表情で、妹さんは僕と天崎さんを交互に見やる。

「え？ そ、そんなことないよ」

「詩乃。新藤君を困らせるようなことは言わないで」

「そ、それならいいんですけどお」

ペコリ。軽く頭を下げてから、妹さんは食事を再開した。

「このハンバーグ、中にチーズとか入れたらいいかもですね」

「チーズ？ ああ、その発想もあるね」

「あ、そうですか。ならばそれはだね、お姉ちゃん」

「ええ？ ど、どうすればいいの？」

「うん。とろけるスライスチーズを折りたたんで、ハンバーグのタネに入れればいいと思うよ。僕はやったことないから、それでいいでしょうかなあ」

「そ、そっか。うん。次からはひとりでやってみる」

「何事も挑戦が肝心だよ」

「あはは。新藤君のその一言で、頑張れそうだよ」

ガッツポーズをする天崎さん。

そのハンバーグを食べて、にっこりと微笑んでる。

「わあ。我ながら、上手にできてよかったあ」

「料理が下手だったお姉ちゃんが、こんなにも上達するなんて。う

ん。新藤さん、侮れない方ですねえ」

尊敬の眼差しで見つめてくる妹さん。

「そ、そんなに下手だったの？ 僕から見ても、そんなふうには感じなかったけども」

「え？ えっとですね」

「し、詩乃っ」

天崎さんに止められて、妹さんはお口にチャック。

「許可が下りなかったので、言えませうん」

イタズラな笑みを浮かべて、妹さんは残っているハンバーグにがつついた。

「すみません。ごちそうになりました」

妹さんは泊まらずに家に帰るそうだ。

玄関で僕と天崎さんは、妹さんを見送る。

「詩乃。帰り道、解る？」

「あはは。だいじょくぶ。タクシー使えば、駅には迷わず着くよお」  
「え、でも、それだとお金もつたいないよ。送ろうか？」

「心配なさらずに。新藤さん」

手を振って、僕の申し出を断る妹さん。

ふと、その背後に何者かが。

「あら。来客中？」

「わ」

「おっと」

びっくりして、僕に抱きつく妹さん。

「ね、ねえさん？ 脅かさないでよ」

「ごめんごめん。詩絵ちゃんのお金が来てたのを思い出して、顔を出したんだけど。あら。早速浮気かしら？ 利之」

「あ、ご、ごめんなさい」

「い、いや。別に」

何だか気まずい空気。

「むっ」

隣の天崎さんは、なんでか頬をふくらませていた。

「もう暗くなってきたし、車かバイクで送るわよ？」

「え、ほんとですか？ うわあ、カッコいい上に親切だなんて。憧れちゃいますっ」

「あらら。そこまで褒められると、ご自慢のバイクでかつ飛ばしたくなるわね」

「制限内速度でお願いします」

「そっ。じゃあ、車で安全運転するわ。とりあえず駅じゃなく、家まで送るけど」

「え？ あ、いえ、わたし家の近くの駅にMTB置いてあるんで。そこでいいです」

背中のリュックサックを動いて整えながら、妹さんはねえさんに

事情を説明した。

「そう。じゃ、あたいが妹さんをその駅まで送るからさ。詩絵ちゃんと利之は、遅れた分だけ勉強しなさいね。」

「そうですね。」

ねえさんと妹さん、妙に息が合ってる。似たもの同士っぽいな。ボタン。玄関がしまった。

「はあ」

いきなり溜息をつく天崎さん。

「ど、どしたの？ 妹さんが心配なの？」

「うん。詩乃が心配って言うより、詩乃がすっかり……あ、なんでもない」

言いかけて口を結んだ天崎さんは、元氣なく自分の部屋に戻った。

「新藤君。勉強しよ？」

と思つたら、部屋から出てきた天崎さんにはにっこり笑顔。

その腕に、リラックマだらけの勉強道具一式を抱えている。

「あ、そうだね。まだ片付けないといけないことあるし、ちょっと待ってて」

「うん。洗い物なら、手伝うよ」

「それはありがたい。あ、お風呂の支度もしないとね」

「……うん」

ほんの一瞬だけ見せた、天崎さんの曇った表情。

その意味を知るのは、そう遠くはなかった。

## 第4話

妹さんが家に来て、その翌日。

「あ」

掃除と朝食を済ませて、交換日記を天崎さんに渡し、リビングで受験勉強している時に。

「ごめん。新藤君。ちょっと時任さんのところに行ってくるね」

「え？ あ、うん」

携帯を見て深刻な顔をした天崎さんが、部屋から飛び出してきた。

「ど、どくしたんだろ」

コーヒーをすすりながら、僕は天崎さんの帰りを待つことに。

しばらくすると、何やら物音が。

「あ、天崎さん？」

ボタン。勢いよく扉を開けて、天崎さんが自室に入っていた。

「ど、どうかしたの？」

心配になり、僕は天崎さんの部屋の前で待つ。

ガチャ。ゆっくりと扉を開けた天崎さんは、手を合わせながら頭を下げた。

「ご、ごめん。新藤君。私、今すぐに家に戻らないといけないの」

「ええ？ ど、どうして」

「じ、事情は時任さんから聞いて。あ、時任さんの車で送られるんだった。あ、後でメールするから。心配しないでね」

玄関で靴を履いている天崎さん。

あ、ちよつと大きめのバッグ。

・・・何があったんだろう。

「そ、そう。じゃあ、僕はここで待ってるよ」

「う、うん」

暗い表情の天崎さん。

この時僕は、自分がどういふ状況に立たされているのか理解でき



ていなかった。

昼前。外の駐輪場近く。ねえさんのバイク置き場にて。

「え。天崎さんはしばらく実家に？」

「ええ、そうよ」

そんな話を、チヨコバットを口に啜えた薰ねえさんから聞かされた。

「急な話だね。何があったのさ？」

「。。。利之、不機嫌ね」

自慢の電動バイクを点検しながら、ねえさんが言う。

これは自分のものだと言いたいかからか、墨絵で描かれた隼のシールがあちこちに張られている。

パツと見、どの鳥なんだか解らない。後にねえさんに教えられて知った。

「え？ あ、いや……そうじゃないって。ただ、詳しいことを知りたいだけなんだ」

「ちよつと待ちなさい。外だと話しづらいわ。数分で片付けるからチヨコバットを食べ終えて、ねえさんか口さみそくに舌を甘噛みしている。」

「も、もしかして。家族に僕が同居していることがバレたの？」

ビクリ。ねえさんの反応からして、当たりだ。

「少なからず、天崎詩穂さんには、利之との同居の許可はもらっているわ」

「あまさきしほ？」

「詩絵ちゃんのお母さんよ。ただ、天崎大悟さんと詩乃ちゃんには、利之のことは話してなかったのよ。まあ、ひとり暮らしってことで話を通して、荷物を動かしてたからね」

「じゃあ、何が起きたの？」

「それは、あたいの部屋で話すわ」

「いいから！ 今、今教えてくれよおっ！」

驚いて、ねえさんがドライバーを落とす。

「珍しいわね。利之が大声で怒鳴るなんて」

「あ、そ、その、いや、ごめん。薫ねえさん」

「いいのよ。利之が詩絵ちゃんをどう思っているのか、今ので答えが出たわ」

「え？ ね、ねえさん？」

すつくと立ち上がって、ねえさんは微笑む。

「あんたは、いざという時はやる男だと信じているわ。利之」

「は、はあ？」

「ふふつ。なんでもないわ」

オイルで汚れた手袋で、自分の頬を拭く薫ねえさん。

その仕草で、ねえさんが涙を流していたことによようやく気づいた。

「ね、ねえさん」

「今はただ、待ちましょう。さあ、部屋に戻るわよ」

「う、うん」

ねえさん専用の車庫にバイクを移してから、僕はねえさんの部屋で事実を聞かされた。

「その、妹さんが、天崎さんのお父さんに？」

「ええ。ついつつかり、口を滑らせたそうよ」

「うっわ〜」

シャワーを浴びてさっぱりしたねえさんは、すっかりくつろぎモード。

風呂上がりにかかいたかくのか、キッチンで探し物してる。

「ふつ」

リビングでごませんべいを目の前にしながら、お茶を飲む僕。

周りを見ると、リラックマグズがたくさんある。

隠していたのを、またここに移したんだね。

「お昼どうする？」

冷蔵庫の中を確認しながら、ねえさんが訊ねる。

「ああ、うん。いいや」

「食べないってこと？」

「そんな気分じゃないよ」

「ふうん。まあ、そこのごませんべいぐらいは食べときなさい。さすがにあたいも、食欲ないわ」

「え？ 珍しい。いつも一日三食欠かさないねえさんが」

「あたいだって、そんな時はあるわよ」

「コトツ。こちらにやってきたねえさんは、ビール缶をテーブルの上に置いて、座布団の上であぐらをかいている。」

「ちよつと、昼間から酒？ ダメだよっ」

「よく見なさい。ノンアルコールよ」

「え？ あ、ほんとだ。ご、ごめん」

「いいのよ。酒もタバコも止めて長いけど、たまあに飲みたくなるのよ。でも、飲酒はよくないからこれで済ませる。それが、あの人の約束だからね」

「約束？」

「天崎大悟さんよ」

「え？ えつと、ねえさん？」

「ん。なあによ」

ぐびぐびと、缶を開けて一気飲みしているねえさん。

それ一本だけかと思いきや、テーブルの下から二本取り出したぞ。いったいいくつ持ってきたんだあ？

「その、天崎さんのお父さんと過去に何かあったの？」

「……………」

無言で、僕を睨みつけるねえさん。

これは、余計なことを聞くなつて意味だらうね。

「ね、ねえさん。凄まじると、さすがに僕も……」

「これぐらいでびびってたら、あの人には勝てないわ」

新しい缶を開けながら、そう答えるねえさん。

ぐびぐびと、また勢いよく飲んでる。水太りしても知らないよ。

「あの人って？ あ、天崎さんのお父さん？」

コクリ。ねえさんは軽くうなづいた。

「ねえさん。何か、考えがあるみたいだけど」

「……………」

「まただ。何も答えず、僕を睨んでいるだけ。」

その眼光に尻込みしそうになるけど、構わずに僕は訊ねた。

「言ってくれよ。僕はただ、天崎さんの助けになりたいんだ」

「それで？」

「ごめんべいをつまんで、ガリガリと食べてるねえさん。」

顔がほんのりと赤いけど、まさか？

「あつ！ これ、ノンアルコールじゃない！」

「ちつ。バレたか」

今飲んでるの、ばつちアルコール入ってるじゃん。

「上の階のねえ、鈴木さんからもらったのよ〜ん」

「いや、入手先なんて聞いてないから」

ダメだ、もう酔ってる！

「あはは。酒なあって、半年振りよよ〜ん」

「ね、ねえさん。水飲んで、寝てたほうがいいよ」

僕は冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し、コップに注いで  
ねえさんに届ける。

「ありがと。利之」

「ありゃ？」

「ねえさん、演技してた？」

「まあ、ね」

パチリと片目を閉じて、ねえさんは伏し目がちに僕に聞く。

「利之は、短い間だけだよ。詩絵ちゃんと一緒にいてどうだった？」

「え？」

「楽しかった？ それとも、迷惑だった？」

真剣な面持ちで、ねえさんは僕の返答を待っている。

「そう、だね。楽しかったよ」

「ほんとに？」

「こんな時に嘘は言わないよ。天崎さんと一緒にいて、僕は楽しかった。苦手な漢字の覚え方を教えてくれたりさ。妹さんにおいしいハンバーグを食べさせようと、一生懸命で。僕も天崎さんのハンバーグが大好きだし、また食べたいと思ってる」

「ふっ。ある単語なくせば、百点満点だったのに」

「はい？」

「なんでもないわ。利之が、詩絵ちゃんが好きなのは解ったわ」

「あ、い、いや。その、ね？ 僕は……」

「うつむくんじゃないわ。弱気になったら負けよ」

「よ、弱気って…？ さつきからねえさん、僕を試しているのかい？」

「ええ。そうよ」

「なんで、そんなことを？」

「後になれば解るわ。少なからずあたいは、利之の力なしではね、今回の件は解決できないと思っている」

「ぼ、僕の力？ 何を、言っているんだい」

「さあ、ね。とにかく今は、気持ちを整理しときなさい。あたいは酒抜きのために、軽く汗でも流してくるわ」

とかいって、リビングで腕立て伏せやら腹筋、スクワットまでやっている薫ねえさん。

健康的に汗をかいているのはいいけど、ふらついてない？

「う、きぼちわるい」

屈んで口を手で塞ぐねえさん。

「あゝ、ダメだこりゃ」

近づいて介抱しようとしたら、ふと僕の携帯に着信が。

「ん？ 誰からよお」

「あ、天崎さんだ」

メールじゃないのか。

と、通話ボタンを押したら。

「もしもし？」

あれ？ 声が聞こえない。

『貴様か。俺の娘と同居しているという不届き者はあああああああああああつ！』

うおつ。大声出されて、思わず携帯を落としちゃったよ。

「な、だ、大悟さん？」

ねえさんは僕の携帯を拾い上げ、すぐに応答する。

『む？ その声は…』

ねえさんは携帯をいじり、音量を上げた。

僕にも聞こえるようにという配慮だね。

「どうして詩絵ちゃんの携帯から、大悟さんがかけてるんですか」

『知ったことか。時任、貴様も責任重大だぞ。家の娘うちを、どこの馬の骨だかわからんのと一緒に住まわせおつて』

「そ、それは…」

ね、ねえさんが押し負けてる。

酔いはさめてるようだけど、いつものねえさんらしくない。

『今からそちらに向かう。何号室だ？ 言え』

「い、言えません」

『なんだと？ ちつ。引越しの荷物に書いてあった気もするが、詩絵と詩乃も断固として言わんからな』

「で、でしたら」

次に、ねえさんはとんでもないことを口走った。

「今からそちらの家に、利之を向かわせます」

え？

『ほう？ 本人がそう言っているのか』

「ええ」

『これはこれは、大それた自信だ。久々にお前の顔も見たいしなあ？ 時任』

ビクッ。ねえさんが恐怖に引きつった顔をしたぞ。

「それはお断りします。今から地図を持たせて、利之にそちらへうかがわせます。詳しいことは本人から聞いてくださいな」

『なんだ？ お前は来ないのか、時任』

「生憎あたしは、マンションの管理人なので。やることがあるんですよ」

ウソつけっ。飲酒運転になるから、行けないんだと正直に言えばいいじゃないか。

『そうか。まあ、別にいいがな。小僧がひとり来たぐらいで、俺は意思を覆したりはせんぞ』

「その言葉、そっくりそのまま返しますよ」

ピッ。ねえさんは言うだけ言って、通話を終わらせた。

「ちよ。ねえさん！ 最後にとんでもないことを言ってなかった？」

「いいから、今から地図を書いてあげる。解らなかつたら、携帯でどうにかなさい」

「ど、どうにかしろって。な、なんであんなこと言ったんだよ」

「信じてるから」

僕の問いには答えず、ねえさんはじつと僕の目を見つめる。

「そ、そう。解った。僕が行かないと、ダメなんだろう？」

「そうね。少なからずあたりでは、大悟さんを説得できない。弱みを握られてるからねえ」

「弱み？ なにそれ」

「……………」

ねえさんに、ジト目で抗議される。

「あれでも、大悟さんは落ち着いてるほうよ」

「そ、そうなの？ 僕には、とてもそうは思えなかったけど」

「まあ、詩穂さんがあれだからねえ」

？ 僕は首を傾げる。

「えっと、天崎さんのお母さんがどうしたって？」

「直接行ってくればいいわ。話をつけるなら今しかないの。この好機は逃しちやいけない」

「よ、よく解らないけど、解った。今から支度するよ」

「頼もしいわねえ。その間に地図とか、いろいろ準備しとくわ。必ず役に立つはずよ」

何か、企んでるなこの人。

でも今は、いちいち追及してられない。

「じゃあ、僕は部屋に戻るね」

「あいよ」

自分の部屋で外出用のリュックサックにあれこれと物を詰め込み、それを背負う。

「うん」

靴を履いて玄関を出て、鍵を閉める。

それからねえさんの部屋の前に行こうとしたら。

「利之。ほら、これが地図よ」

外の廊下でねえさんが待っていてくれた。

「準備が早いね」

メモ用紙に書かれた地図と、もうひとつビニール袋があるけど。

「それは？」

「いざという時の切り札よ。緊急事態になったら、これを使いなさい」

「は、はあ」

僕はリュックを下ろし、そのビニール袋を中にしまう。



「じゃあ、行ってくるよ」

「ええ。期待して待っているわ」

何を期待して　まあ、解っているよ。

僕が、天崎さんを連れ戻すってことでしょうか？

やれるだけ、やってみるさ。

定期を使って電車に乗り、天崎さんの地元である駅に降りた。

「ん〜と」

改札を出て、右か左か解らないので、端に移動して道を確認する。地図を見る限り、こっちか。駐輪場のほうに向かえばいいんだね。

「しかし、大雑把な地図だなあ」

ねえさん、もう一本のビールも飲んだなあ？

実に汚い地図だよ。もう。

そのおかげで、天崎さんの家に辿り着く頃には日が傾き始めていた。

「えっと」

恐るおそる、ピンポ〜ンを押す。すると。

「あ、はあい」

中から、聞き覚えのある声が　あ、やっぱり。

「天崎さん？」

「あ、新藤君っ？」

玄関を開けた天崎さんは、びっくりして両手で口を塞いでいる。

「ほ、ほんとに来ちゃったんだ」

「うん。嫌だった？」

「そ、そんなことよりっ。は、早く逃げたほうがいいよ」

「なんで？」

「だ、だって、お父さんに見つかったら　」

「もう遅い」

背後から、しわがれた低い声が聞こえた。

間違いない。携帯電話越しで耳にしたのと、同じ声だ。

「君が、時任の言っていた小僧か」

うわっ。振り返ったら、恐ろしい顔の人が　　って、それは天崎さんに失礼だね。

す、凄い体格。筋肉質で、言うのものはばかられるけど、顔がいか  
つい。

「中に入りたまえ。もう夕暮れだしな。せっかくだ。一緒に夕飯で  
もいただごう」

「は、はい」

こ、これは、ねえさんも怖がるはずだよっ！

声だけならまだしも、実際に目の当たりにしたら、手足が震えて  
しまう。

「こちらだ。そこに座りたまえ」

玄関で靴を脱ぎ、僕はリビングに案内され。

足の長いテーブルのほうに着席するよう促される。

リュックサックを下に置いて、僕は椅子に腰を下ろした。

隣には天崎さんが着席してる。

「ついさつき、詩絵がハンバーグを作ったのでな。詩乃は急に仕事  
が入ったとかで、都内のほうに出かけてしまった。ひとり分余って  
いたのでな。よかつたら君がいたかどうかと聞いて」

「え？　い、いいんですか？　妹さんの分を食べてしまつて」

「詩乃はタレント業でいそがしいからな。駅まで車で詩乃を送って、  
帰ってくる途中にまさか。時任の差し向けた小僧に出くわすとは。  
こいつあ愉快だ」

ああ、なるほど。

だからいきなり、背後から現れたんですね。びっくりしたあ。

「妹さんって、芸能人だったんですね」

「まだ無名のほうだがな。ファッションとかの雑誌の仕事が中心だ

が、最近ではテレビでの露出も増えてきている」

「そ、そうなんですか。次からはチェックします」

「ふん」

「こ、こわっ。」

天崎さんは席を離れて、四人分の食事をここに運んでくる。

あれ？ 四人？ ここには三人しかいないけど。

「あの、そちらのほうは？」

「まだ詩穂は寝ているのか？ 詩絵、起こしてきなさい」

「休ませてあげたほうがいいよ。もうすぐなんだし」

「む。そうか。まあ、堅苦しいのはなしにしていたらこう」

「あ、はい。いただきます」

「いただきます」

天崎家の夕飯は、ご飯に味噌汁、ハンバーグ。

付け合わせの野菜は、ニンジンとジャガイモにブロッコリーだね。

僕が教えた通りのできばえだ。

「中にチーズが入っているからね」

「そうか。どれ」

天崎さんのお父さんは、箸でハンバーグをほぐして「おお」と喜ぶ。

「よくできているな」

「あ、うん。新藤君が教えてくれた…から」

言葉の途中で、僕を睨む天崎さんのお父さん。以降、心の中じゃ大悟さんと呼ぶけど。

その空気を察して、天崎さんも言葉に詰まる。

「なるほど。時任が教えたのかと思ったが、君が詩絵に料理を？」

「あ、その。ねえさんも少しは」

「ねえさん？ 君は、時任の実弟か？」

「い、いえ。いとこです。あ、すいません。僕の名前は、新藤利之です」

「ああ。すまない。俺の名は天崎大悟という。自己紹介が遅れてし

まったな」

「すいません。僕も、名乗るのが遅れてしまって、頭を下げて、謝っておく。」

何となく、大悟さんを怒らせたり、敵に回したら危ないって気がしたからだ。

「今は腹ごしらえが先だな」

「そ、そうですね」

緊張で、ハンバーグの味がよく解らない。

でも、食感は解る。軟らかくて、チーズがとろとろしてる。

「ど、どうかな？」

「うまいぞ。詩絵。かなり上達したな」

「そ、そう」

ほっと胸を撫で下ろす天崎さん。ちらつと、僕のほうを見る。

落ち着いて食べてみると、これはいい塩加減だ。ソースも教えた通り、よくできてるね。

「うん。おいしいよ」

「そ、そっか。新藤君がそう言ってくれるなら、自信が持てるよ」  
うっ。このピリツとした空気。

大悟さんは、僕のことをあまりよく思っていないみたいだ。

とりあえず、味噌汁を一口すすする。

「あらあ？ 来客中かしら〜ん」

ん？ 女の人の声？

のんびりした口調で、この場の緊張が和らいだ気がした。

「詩穂？ 起きたのか」

「ええ。お腹が空いちちゃってねえ〜。詩絵が味噌汁の作り方を教えてって言ったから、できのほうは あら？ そちらの子は〜？」

「あ、新藤利之です」

起立して、自己紹介する僕。

味噌汁も、天崎さんが作ったのか。かつお節を愛用する僕とねえさんのとは違うダシだ。何を使ってるんだらう？ 聞いてみたい。

「あらあらあ。緊張しちゃって」。パパが怖い顔してるからでしょ」

「ぬ」

「うっ。また空気が重くなったぞ。」

「え？ そんなことは。初めて天崎さんの家に来たので、ちょっと」

「そ〜なの？ 気楽に、自分の家のように過ごしてい〜のよ。あ、あたしは天崎詩穂っていうの。以後よろしくね〜」

ふと、僕は天崎さんのお母さんのお腹がぽっこり出ているのが見ついた。

あ、心の中では以後、詩穂さんと呼ぶことにします。

「ん〜？ あ、これは自腹じゃないわよん」

「え？ と、ということとは」

「おめでたよんよん」

言いながら、着席する詩穂さん。

「ささ、どうぞどうぞ。遠慮せずに食べちゃいまそ」

ふう。和んだ空気にしてくれた、詩穂さんに感謝しないと。

でも、それは食事中だけに限られた。

「さて、本題に入るとするか」

僕は席に着いたまま、キッチンで洗い物をする天崎さんのほうを見やる。

詩穂さんはリビングにあるソファに座って、テレビ鑑賞してた。

そちらには足の短いテーブルがあり、下にはカーペットが敷いてある。

僕のいるほうは食事用で、詩穂さんのいるほうはくつろぎスペースのようだ。

「はい」

大悟さんのほうを向き直り、僕はその先を促す。

「詩絵はこちらに戻ってもらおう」  
いきなり、そんなことを言われても。

「君が時任の親戚だとしても、こちらとしては詩絵をよく知らぬ男と同棲させるのは許可できない。ましてや、おたがいにまだ子供だ。後で間違いを起こして、その責任が取れないとぬかされても、こちらが困るのでな」

「お、お父さんっ！」

天崎さんが大声を上げる。

「詩絵は黙りなさい」

無言で、洗い物を再開する天崎さん。

ソファでくつろいでる詩穂さんは、ちらつとこちらを様子見しただけ。

「なんだ？ 新藤君、何か言いたいことがあるのか」

う、くつ。この人、凄い迫力だ。

ねえさんの比じゃない。

確かに、ねえさんの睨みぐらいでびびってたなら、勝ち目がない。

勝ち目がない？

ねえさんに言われて、流されるままここにやってきたけど。

「……………」

「だんまりか？ 黙秘権など、通用せんぞ。君が何も言わなければ、詩絵はこの家に戻るということで賛成と見なすが？」

このまま引き下がったら、きっと。　　いいや。

絶対に、後悔する。

「ほう？ いい目をしているな」

「僕は、天崎さんと一緒に受験勉強がしたいです」

「なんだと？ それは許すことはできん」

その気迫に、圧倒されそつになる。

手足が、また震え出す。

歯を食い縛り、僕は意を決した。

「天崎さんは連れて帰ります」

その瞬間、大悟さんが本気で凄んでくる。

「ほう？ 大した度胸だ。時任が面倒を見ている小僧だから、素直じゃないと思っただけだ。こつこつと単刀直入に切り込んでくるたあな。意外だぞ」

「っ」

ダメだ。怖くて、次に何を言えればいいのか解らなくなった。

ふう。深呼吸して、ちゃんと説得しないと。

「短い間でしたけど、僕と天崎さんはおたがいに苦手科目を教えあつてきました。ひとり暮らしだと皆さんをだましていました。ねえさんも反省してますし。僕も、事情を知らなかったとはいえ、天崎さんのご両親に心配をおかけしました。申しわけありません」

「謝って済むなら、俺のような警察はいらんのさ」

「警察？」

「ん？ 時任から聞いてないのか。俺は警察署に勤めているんだ、だからっ！ この人すっごく怖いつて思ったんだよ！

やり方が刑事ドラマで見た取り調べっぽいから、ようやく確信できた。

「そ、そうなんですか」

「で、謝った次は何を言う気だ？」

この人、やっぱり怖い。

尋問されている感じだよ。でも、臆したらダメだ。

「僕にとって、天崎さんは必要な存在です」

ガシャン。キッチンのほうで、何かが割れる音がした。

「詩絵。手を出しちゃダメ。今片付けるわ」

詩穂さんが、何かを壊したらしい天崎さんのところへ駆け寄る。

「ほう…？ いきなり何を言うかと思えば、そんな冗談をぬけぬけ

と」

「その、天崎さんの意見も聞いてあげてください。それに僕は、冗談で言っただつもりはありませんから」

「っ」

大悟さんが拳を振り上げた。

僕はつい反射的に、目を閉じてしまう。

「そんな軟弱者に、詩絵を任せることはできん。ましてや、中途半端な覚悟で言っただのならなおのこと。駅までは送ってやる。さっさと帰れたまえ」

「嫌です」

「なんだと？」

「あなたひとりで、天崎さんの自由を奪わないでください」

「青二才が。詩絵の親である俺に意見するのか？ どういう了見だ」

「天崎さんは、僕と同居することに最初は困っているようでした。」

それは僕も同じです。時間が経つにつれて、おたがいのことがよく解りましたし。受験勉強もはかどっていました」

「成績がどう変わったのか、まだ結果は出ていないだろう？ 仮定の話を持ち出すな。それに成績が上がっていたとしても、俺は君と詩絵の同棲を認めるわけにはいかない。まだ若いのに、そんな環境を与えた時任にも、後できつく言ってやらねばな」

「ねえさんは関係ありません。その生活を選んだのは、僕と天崎さんのふたりです」

嘘だ。本当はねえさんに強要されたけど、それをここで言うのは得策じゃない。

「なあにい？ 本当か、詩絵」

「え？ あ、う、うん」

確認した後、大悟さんは頬杖をついて、僕に睨みを利かせる。ふう。僕のはつたりに合わせてくれてありがとう。天崎さん。

「となると、なんだ？ 君は、詩絵をどう思っているんだ」

「え？」



「時任はただ環境を与えただけだろうか。 ならなせ、君は詩絵と一緒に住むことに同意したんだ？」

「そ、それは……」  
言葉に詰まる。

「そんな半端者に、詩絵を預けられるものか！」

バチン。 そんな音がしたと同時に、僕の視界が真っ暗闇に覆われる。

「う、うう……」

「ちよつと、お父さん！」

天崎さんが僕に駆け寄って、頬をさすっている。なく、られたのか……？

椅子から転げ落ちて、床に倒れているのか。僕は。

「だ、だいじょうぶだよ」

天崎さんから離れて、僕は椅子を起こし、再びそこに着席する。

「ほう？ なかなか肝が据わっているな」

「殴られたぐらいで、僕は諦めませんよ」

「まだ言うか？ 半端な覚悟で、家の娘を預かるなど言っているんだ。君が迷いを見せたから、つい俺は手を出してしまった。それは詫びねばならん」

深々と頭を下げる大悟さん。

「いえ。僕も悪かったです」

頬をさすりながら、僕も頭を下げる。

「それで、君の気持ちはどうなんだ？」

「そう、ですね。僕は、まだよく解っていません」

「なんだと？」

「そ、そのつ。責任を取るとか、間違いが起きるとか、その可能性はないと思います」

「ない？ そう断言できる根拠はあるのか？」

「もしそうだったら、僕は本気になっていますよ」

あ、あれ？ ぼ、僕は何を言ってるんだっ？

「本気、だと？ 本気で詩絵を好きになつていると言いたいのか」

「そうですね。そうだったらもう、間違いとは言つのは失礼でしょうし」

じ、自分の口から勝手に言葉が出てくる。

「でもまだ僕は学生です。自分の将来について、こうだと決められない部分もあります」

「何度も言つぞ。そんな半端な覚悟で」

「まだ、話は終わつてません」

「……………。そうか」

顎を振つて、その先を促す大悟さん。

「ふう」

僕は、少なからずそう思っている。

妹さんが来た時、邪魔だなあと思つて自己嫌悪に陥つたり。

天崎さんが実家に戻つて、それでねえさんに対して感情的になつたり。

僕は今、自分の気持ちをはっきり理解した。

「いつか僕は、天崎さんに相応しい男に」

ガダン。キッチンのほうで、大きな物音がした。

「う、くうっ」

詩穂さんが、お腹を押さえて苦しんでいる。

「ど、どうした。詩穂」

「お母さんっ？」

天崎さんが詩穂さんに寄り添い、何かに気づいた。

「は、は、破水してる!」

「なにっ?」

僕はすぐに詩穂さんに駆け寄り、腰をさすってあげた。

「あ、ありがと…っ」

「あんまりしゃべらないください。あ、あの。早く車の用意を」

「ぬ。そ、そうだな」

大悟さんは車のキーを持ち、この家を飛び出した。

ん? なんだ、こんな時に携帯が震えるなんて。

僕はポケットから携帯を取り出し、ねえさんの名前を見て、あることを思い出した。

「そうだ」

緊急事態。その言葉が脳裏をよぎった。

「天崎さん。腰をさすってあげて」

「う、うん」

僕はリュックサックからビニール袋を手に取り、中身を見て確信する。

ええい、考えるのは後だ!

中から大きめのバスタオルを二枚取り出し、それを天崎さんのほうへ投げる。

「わ。な、なんでそんなのが…?」

「いいからっ! それで水を拭き取り、覆い隠して!」

「う、うんっ」

まだ何かあるぞ。これは。

「メモ書き…?」

よく解らないけど、何かの番号が書いてある。

「それ、あたしの通っている産婦人科よ」

「え?」

「そ、そこに連絡して、状況を説明して。お、ねがい…っ」

詩穂さん、とても苦しそうだ。

「え、えっと。わ、私が?」

僕がうんとうなづくと、天崎さんは近くにあった子機を取り、そ

ここに電話連絡した。

その間に、大悟さんが戻ってくる。

「詩穂。そのままじつとしている」

わ、凄い。その太い腕で、詩穂さんを軽々と抱え上げた。

「何をぼうつとしてしている。新藤君。君も手伝ってくれ」

「は、はい」

僕と大悟さんは、詩穂さんを車に乗せる。

天崎さんは家の電気を消し、戸締まりをして、僕と詩穂さんのいる後部座席に乗り込んだ。

「シートベルトは　くつ。ふたりで詩穂を押さえてくれ」

詩穂さんが妊婦だということを思い出して、大悟さんはシートベルトを自分だけ締める。

僕と天崎さんがシートベルトをしたのを確認してから、大悟さんは車を発進させた。

「お、お父さん。飛ばしすぎだよ」

「構うもんか。愛妻が苦しんでいる時に、制限速度など守ってられん」

「じ、事故を起こさないでください。お、落ち着いて！」

「ぬ」

僕が言うと、大悟さんは制限速度を少し上回るぐらいで走る。

「裏道を通るぞ。後数分で着くからな。詩穂、耐えろよ！」

「え、ええ…っ」

目的地の産婦人科に着いた。

僕らは待機していた人たちと協力して、詩穂さんを中に搬送する。はんそう

「後は、祈るだけですな」

「そ、そうだな」

詩穂さんを分娩室まで運ぶのを手伝った後、僕と大悟さんは長椅子に腰を下ろす。

扉の奥で詩穂さんが頑張っている。

そう思うと、手に汗を握ってしまうよ。

「はい。ふたりとも」

「あ、ありがとう」

「悪いな、詩絵」

天崎さんは僕と大悟さんに、お茶のペットボトルを手渡した。

それを開けて、一口いただく。

「ふう」

「ぬぬぬ」

足先が落ち着かない大悟さん。お茶も飲まずに、貧乏揺すり。

もうすぐ子どもが生まれるとあって、緊張しているようだ。

「お父さん。初めて出産に立ち会うからって、みっともない。堂々

としてなよ」

「む。そ、そう言われてもなっ」

「はい。お父さん」

「む。す、すまない」

天崎さんは赤いコリラックマのハンカチを、大悟さんに差し出し

た。

それで汗を拭い、大悟さんはお茶を一口飲む。

「新藤君。お母さんを助けてくれてありがとう」

「え？ あ、いや。僕は何もしてないよ」

天崎さんに礼を言われて、僕は困惑する。

「謙遜するな。新藤君がいなければ、俺は冷静に対処できなかった」

「そ、そんなことは」

「あ、あんまり言い慣れてないのでな。うむ。その、ありがとう」

照れながらも、大悟さんは僕に感謝の意を表した。

「あ」

「ん？」

おぎゃーっと、扉の向こうから赤ちゃんの産声上がる。

「よかった。生まれたんだ」

ポン。手を合わせて、安堵の溜息をつく天崎さん。

「は、早いな。数十分、数時間はかかると思ってたんだが」

「破水してたし、何より三人目だもん。お母さんも産み慣れてきたんじゃない？」

「そ、そうか。うむ。ど、どっちだろうな？ 名前を考えていたんだが、ちつとも決まらないぞ。ぬうつうつうつうつ」

ありやりや。名前のことで頭を抱えてるよ、大悟さん。

「あ、ご家族の方。元気な男の子が生まれましたよ」

中から医師と看護婦さんが出てきて、僕らにその結果を伝えてくれた。

「え、ほんとですか？」

「ええ。母子ともに健康です。ささ、中に入ってください」

天崎さんと大悟さんは分娩室に入ろうとするけど。

「む？ どうした、新藤君。座ったままで」

「ああ、いえ。僕も入っていいのかなと」

「構わん」

その一言で、僕は中にお邪魔することに決めた。

「あら。パパ、念願の男の子よ」

詩穂さんはベッドの上で、産まれたばかりの赤ちゃんを抱いて、にっこり笑顔。

「わあ。かゝわゆいゝ」

詩穂さんから男の子を渡されて、天崎さんも笑顔満開。

「よしよし」

うれしそうだね、天崎さん。

「むう。三人目で、ようやく、ようやく男が誕生したかあああああ

あああああ

感動して号泣している大悟さん。

その男泣きに、医師と看護師の方々はびっくりしている。僕もね。

「お、お父さんっ。ここで泣かないでよっ」

「あははは。パパあ、ほら、抱いてあげてよっ」

詩穂さんは元気そう。

僕はほっと胸を撫で下ろして、この場を後にした。

「ごっほん。見苦しいところをお見せしたな」

「い、いえ」

僕と大悟さんは、車の中で待機している。

天崎さんは病室で詩穂さんの世話をしてて、こっちに戻るのにもう少しかかるそうだ。

「僕も、いざ自分の子どもが産まれることになったら。多分、同じことをするかもしれませんね」

「む」

「あ、そ、その」

「まあ、別にいいがな。今回の件で、君が信頼に値する人間だといふのは理解できた」

大悟さんはペットボトルのお茶を一口飲む。

「新藤君。君の服がびしょ濡れになってしまったな。今夜は家に泊まるといい」

「え？ な、なんでですか」

「時任のマンションまでは距離があるし、何より緊急の連絡が入ってな。夜勤しなければならなくなった」

携帯電話を片手に、バックミラーで僕を見つめる大悟さん。

「そ、そうなんですか。警察官も大変ですね」

「そうでもないがね。本音を言えばな。慌ただしく家を飛び出したから、何か不手際があるかもしれん。それに、詩絵を家にひとりにするのは心配だな」

「あ」

そっか。そういうことだったんだ。

「少なからず、今まで君は詩絵とマンションで一緒に暮らしていたわけだ。そんな詩絵も詩乃も、君は悪い人ではないと一点張りだね。」

実際会ってみなければわからない。が、どうせ碌な奴じやない。そう決めつけていたんだが、家の女性陣はどうも君がお気に入りらしい。詩穂も君なら詩絵を任せられるとか、そんなことを病室で言っていたよ」

「え？ あ、そ、そうですか」

「ふっ。そういえば、あの時君は何を言おうとしていたんだ？」

「はい？」

「詩穂が、苦しむ前に何かを言おうとしていただろう？」

「あ、ああ。はい」

「ごほん。改めて、僕は。」

「僕はいつか、天崎さんに相応しい男になってみせますよ」

と、決意表明した。

「そう、か」

大悟さんはシートベルトを締めた。

天崎さんがやってきたことに僕も気づく。

「おまたせ」。お母さん、今日明日はここで様子見だって」

助手席に座る天崎さんは、ちらっと僕のほうを見て、シートベルトを締めた。

「そうか。まあ、検査なり診断なりされたほうがいい。俺が感情的になって、詩穂を苦しめる結果になってしまったからな。たまには俺のいないところで、ゆっくりしてもらうのがいい」

「そ、それはひどいよ。お父さんっ」

「む。ど、どうしたんだ。詩絵」

「お母さん。お父さんに感謝してたよ？ 新藤君にも、私にも、詩乃にもね」

「ぬう。ま、まあ、詳しい話は後だ。ふたりを家まで送るぞ」

大悟さんはエンジンをかけて、後部座席にいる僕に。

「新藤君。君も早くシートベルトをしたまえ。水っぱいのは我慢し



「てくれよ」

「は、はい。安全運転をお願いします」

「ふはははははつ。なかなか愉快な子だな。時任の親戚は、おもしろいのばかりだ」

意味深いことを言って、大悟さんは車を発進させた。



「でもまあ、ふたりののおかげで天崎さんのお父さんを説得できたわけだし」

「そ、そだね。お父さん、頑固だから何を言っても聞いてくれなかったもん。私ね？ 新藤君が来た時、ちょっと感動しちゃった」

「ええ？」

僕は隣にいる天崎さんを見つめて、ドキツとする。

「ん？ どしたの。新藤君」

「あ、いや、その」

好きだという気持ちを自覚してからというもの、天崎さんの目を直視できない。

「ど、どしたの？ 顔、赤いよ？」

「ああ、うん。だいじょうぶ」

本当はだいじょうぶじゃない。

心臓がバツクバクだよ。

「あのさ、あの時。何て言おうとしたの？」

「えっ!？」

「いや、だって、お母さんがああいうことになっちゃったから。聞けずじまいなんだよね」

うっ。大悟さんには答えたけど、いざ天崎さんを前にして言うのは き、緊張する。

「ほ、星でも見ようか」

「あゝ、ごまかした〜!」

いや、だって、本人を目の前にして あの時、僕は言うはずだったけれども。

あ、改めて、ていうのは、ちょっとねえ。

「ういしょっと」

僕はカーテンを開けて、夜空を見上げる。

「わあ」

「ん？ どうしたの。天崎さん」

「マンションに戻ったら、またふたりで星を眺めたいね〜」

「あ、うん。そだね」

しばらく星座のお勉強。

僕らはCMが終わったのと同時にカーテンを閉めて、再びソファに座った。

「あ、新藤君。リビングの隣の客間で休んでね」

「そ、そう。布団は？」

「その押し入れにあるから、後で私が手伝ってあげるよ」

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

ペコリ。天崎さんは可愛くおじぎをした。

「あれ？ 新藤君、やっぱり顔が赤いよ」

「そ、それはっ」

声が裏返ってしまう。

「それは？」

無邪気な笑顔で、僕の目を見つめる天崎さん。

いや。

「詩絵ちゃんが、可愛いからだよ」

「・・・え？」

天崎さん もとい、詩絵ちゃんはポカンと口を開けたまま。

お星様から勇気をもらって、僕は天崎さんへと一歩踏み出せたよ。

「あはは。お返しだよ」

「ふえ？」

僕が言っていると、詩絵ちゃんは顔を赤くしてうつむいた。

「な、なな、ななななんぞっ？」

「お、落ち着いて。詩絵ちゃん」

「うええええええええっ？」

軽くパニックになっている詩絵ちゃん。

「な、な、な、名前で…？」

「うん。詩絵ちゃんも、僕のことを名前で呼んで欲しい」  
言つてて、気恥ずかしいよっ。

「と、利之…君？」

「う、うん」

おたがいに、顔が真っ赤だったのは自覚できてるよ。

「あ、もうこんな時間か。いつまでも起きてちゃダメだね。早く寝ないと」

「ご、ごまかそうとしてる〜！」

「だ、だって、その、わわっと」

「利之君。その、ありがとね」

「あ、いや。僕のほうこそ」

「お父さんに立ち向かっている時の利之君。私を救いに来た王子様みたいだったよ」

「そ、そこまで言わなくても」

「あはは。じゃ、お布団敷いてあげるね」

天崎さんにはにっこり笑顔で、客間のほうへ歩いていった。

「ふ、ふう」

僕はその背中を追いかける。

ほんの少しずつ、僕と詩絵ちゃんの距離が縮まっているような気がした。

もうすぐ、夏休みが終わる。

二学期が、始まるうとしている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2527v/>

---

星が見たいね

2011年8月11日03時25分発行